
トラスト・オブ・テウルース

天童翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トラスト・オブ・テウルース

【Nコード】

N5142U

【作者名】

天童翼

【あらすじ】

ホテル経営を学ぶべくアメリカで修行をしていた、若干、お人好しな吉井翔。

やっとの思いで日本に帰って来た彼はVRMMOのゲームである《トラスト・オブ・テウルース》をプレイし始める。

彼はゲームの中にある七つの属性の魔法の内で最も熟練度は上がりにくいが便利な影の魔法を選択する。ある程度、プレイしたらアバターを作りなおそうと思っていた矢先、一攫千金イベントで金貨1万枚を手に入ってしまった。

金貨を手に入れたため影の魔法を選択したままプレイしようと決めた彼だったが変なメッセージに答えると　突然、知らない場所に飛ばされてしまう。

そこはトラスト・オブ・テウルースの魔法とお金が使えぬ異世界だった。

力を持っていない彼は頭とお金を駆使して元の世界へ帰るべく、動き出すのだが……その先に待っていたのは……

Prologue (前書き)

本編に入る前に注意事項をいくつか。

この物語はフィクションであり、実在の人物、または国家、団体とは一切関係がありません。

作者は現在、多忙なため感想の返信がすぐにできない場合や返信ができない場合があります。申し訳ありません。

作中の通貨であるエルの価値は、ゲーム内と異世界では異なっています。

タイトルであるトラスト・オブ・テウルースのテウルースはオリジナルの固有名詞であり誤字ではありません。アルファベットで考えた固有名詞をカタカナ表記に直す際に、テウルースよりもテウルースにした方が作者的にはしっくりときたためテウルースにしましたが、読むときは普通にテウルースと大きいウで読んでいただいて構いません。

Prologue

『ゆ、優勝したのはKAKERU選手だあ〜』

広場の中心にあつた会場を包み込むほどの

「おお〜」

という歓声が聞こえてくる。

ほとんどがNPCだろうけど数人プレイヤーもいることだろう。
その歓声の熱気にやられてくらくらししていると水着の　それも
ビキニのような格好をした女の子が僕に近づいて来て

「おめでとうございます」

という言葉と共に僕に花束を渡してくれる。

それを受け取った後、ヒーローインタビューのようなものをされた。
た。

だけど、まったく何を話言ったか覚えていない。

その後に控え室のようなところに案内されて《トラスト・オブ・
テウルース》におけるスタート地点の街の領主様に

「おめでとう。まさか、これを手にする者が現れようとは……君は
もしかしたら世界に変革をもたらす者かもしれないね」

と言われながら、大きな袋を手渡される。

その瞬間　視界には『一攫千金イベントクリア』という文字が
浮かんでくる。

大きな袋を開けてみると、その中は金貨でいっぱいだった。

今度、視界に浮かんできたのは『財布に収納？』 or 『影に収納？』という文字だった。

確か、財布にはまだ1000エルしか入らなかったはずだから僕は『影に収納』を選択。

すると、袋から大量の金貨が流れだして僕の影に入っていく。

その額は1億エル。

エルというのは現実世界のドルと価値が同じらしい。

もし、現実世界でこんなお金を持ってしまったら人生が破滅してしまうかもしれない。

ゲームの中とはいえ、このお金は堅実に使っていこう。馬鹿みに使ってしまったら現実でも金銭感覚が狂ってしまうかもしれない。そう僕は心に誓いながらも始めてダイブしたVRMMOのゲームでイベントをいきなりクリアできたことに喚起するのだった。

VRMMO フルダイブとも言われる現象は人間の五感を全てゲームの中に持っていき、まるで現実で体を動かすのと同じようにしてアバターを操作し数々の冒険を擬似体験するゲームシステム。

これが生まれたのは僕が大学一年生の時だった。

それなりにゲームをしていた僕もしてみたかったが値段により挫折。

さらに、安全面での指摘が世論から成されたために一時、販売を中止していたのだ。

そして僕が大学を卒業する頃に国からの安全保証をもらって、もう一度、正式稼働した。

本当は、その時にプレイしてみたかったのだけれど卒業と同時に祖父の経営するホテルに就職したことによってそれは叶わなくなつた。

なぜなら、いきなり祖父に「修行してきなさい」と手紙をもらいアメリカのホテルに飛ばされ、接客、経営、交渉などのノウハウを言葉も通じない国で叩き込まれた。

アメリカにもVRMMOは存在したが毎日、倒れるまで働いていた僕にそれ買ってプレイしている余裕はなかった。

そして五年経ち、やっと僕が日本に戻れる頃になるとVRMMOの本体の値段は5万円まで下がっていた。

これは技術革新かもしれない　と世間では騒がれた。

日本の祖父の元に戻るにあたり一週間の休暇がもらえたので大学時代の友人と会ったりして四日潰し、後の三日でVRMMOをプレイしようと思っていた。

そんな矢先にホテル経営の後継者は父親の兄の息子さんに決まった。

正直、ホテル経営の難しさをアメリカで知り継ぎたくなかった僕からすれば、これほど嬉しいことはなかった。

僕はそれを聞いた時、友人と会うのをやめて一番に父親の兄の息子さんに「おめでとう」を言いに行った。

ついでに「何も文句は言わないからVRMMOの本体、買って」と頼んだら苦笑いをされたけど買ってくれた。

実は父親の兄の息子さんとは兄と弟みたいな関係だ。向こうは五歳年上なため昔からゲームや漫画を買ってもらったりしていた。

その後、友人と会ったりしていたら、ついに待ちに待ったVRMMOの本体とソフトである《トラスト・オブ・テウルース》が宅急便で届けられた。

現代のオンラインゲームはインターネットに接続できる環境と市販されているソフトの両方が必要だ。

ソフトにお金がいる分、課金制がなくなった。これは二十一世紀にあった色々なトラブルのせいだ。まあ、その話しはおいておこう。

とりあえず、僕はVRMMOの本体である孫悟空がしていた緊箍きん児こじのような頭につける機械の輪に色々なケーブルをつけてネットに接続していく。

予め、自分に似せた黒髪、黒い瞳のアバターを作っていたのでそれを《トラスト・オブ・テウルース》の中の自分のアバターに選択して《トラスト・オブ・テウルース》に目を閉じてからアクセスした。

次に目を開いた時には市役所の受付のようなものがたくさんある部屋に出た。

部屋の壁は木造で機械の類たぐいも一切ない。

《トラスト・オブ・テウルース》の世界観が中世のヨーロッパのような感じに設定されているらしいから、それを崩さないためだろう。だけど、正直に行って現実世界と何ら変わらない。

深呼吸もできるし……試しに腕を摘んでみる　痛みはない。

そのことがここをゲームの中だと理解させてくれる。

それにしても……頭につけた輪でこういう現実味をおびた世界に來れる技術を開発したに技術者さんに対しては凄いと言えない。

とりあえず、説明書に書いていた通り僕が受付に近づくと

「プレイヤーネームKAKERU様ですね？」

鮮やかな金髪碧眼の受付の女性に話しかけられた。
それに多少、びくつきながら

「はいっ」

と答える。

「ふふ、あたしはNPCではないのでそこまで緊張なさる必要はありませんよ。決まった言葉しか言えない訳ではありませんので」

「そうなんですか？」

その言葉を聞いてホッとしてしまう。

ノンプレイヤーキャラクター

別にNPCのことが嫌いな訳じゃあないけれど、今まで目の前にいて話しをしていた人間というのは、全てコミュニケーションがとれる相手だった。

こちらが何を言っても決まった言葉しか言わない相手は苦手意識を持たずにはいられないのは、どうやら僕だけではないようだ。

「はい。KAKERU様は《トラスト・オブ・テウルース》のプレイは初めてでしょうか？」

「はい」

ゲーム・マスター

「でしたら、まず、我々はGMと呼ばれる管理人のようなものですので、何か不都合がございましたら、声をおかけください。ただし、ゲーム中でのプレイに関しての質問などには一切、お答えできません。あくまでバグなどの要素にのみお答えします」

「分かりました」

これは普通だ。

運営にゲームの攻略法を教える、何て言う人もいるらしいけど。

「では、《トラスト・オブ・テウルース》では七属性の魔法の内、種類だけ使うことができます。それをこの場で決めていただきますま

すが、よろしいですか？」

「はい」

これは説明書にも書いてあった。

基本的にはここで決めた魔法しか使えなくなるらしい。

ただし、熟練度がMAXなると、追加属性として風に雷を纏わせた攻撃ができるようになったりするそうだけど。

ちなみに回復系の魔法は特別な魔導書を持っていれば使えるらしい。

基本的にはアイテムで回復が主流らしいけど。

「では、炎、水、風、雷、光、闇、影の中からお選びください。熟練度の上がりやすいのは今、申し上げた順番です。ただし、使いやすさでいえば後の方に申し上げた属性の方が使いやすいです」

「そうなんですか？ 例えば影だと？」

「アイテムやお金などを自分の影に収納することができます。決闘などで負けてしまった場合も相手にドロップされることはありません。その他にも光なら暗い洞窟を明るくすることもできますし、闇は他の全ての属性の魔法攻撃を飲み込むことが可能です」

久しぶりのゲームだから、どれが良いのか判断が着かない……どうせ分からないなら一番使い勝手が良いのにするか。

「影をお願いします」

「……本当によろしいのですか？」

「ええ、お願いします」

「少々、お待ちください」

受付の女の人は画面を起動させてキーボードのようなものを叩いている。

「完了いたしました。では、ステータスと言ってステータス画面を出して確認してください」

そう言われて「ステータス」と呟き、ステータス画面を出現させて確認してみる。

そこにはアイテム画面には木剣と100エルがあるだけで他には何もない。

魔法欄には属性『影』熟練度1と書かれている。

「合っていますか？」

「はい」

「では、最初のイベントである『じゃんけん大会』に出場することが可能です。出場しますか？」

「どんなものですか？」

「ただ、じゃんけんをして勝っていけば、勝利数により賞金が授与されます。ボーナスイベントだとお考えください」

「じゃあ、お願いします」

「分かりました。GM小屋を出て、右に行つたところで『じゃんけん大会』に出場受付がありますのでこれをお渡しくください」

そう言つて、『じゃんけん大会出場件』という紙をくれる。

「では、『トラスト・オブ・テウルース』をお楽しみください」

そう言われてから、僕はGM小屋を出るべく扉に近づこうとする

と

「兄ちゃん、何もんだい？」

そう声をかけられた。

声をかけてきたのは赤い髪に翠の瞳のイケメン勇者風の男だった。アバターは自分の容姿に似せる必要はないので別に本当の姿はブサイクでもイケメンでも、どんな容姿にでもできる。

「どういうことですか？」

見た所、目の前の男も初心者だったので知り合いを作る意味でも、少し話をしておきたかった。

「だって、影を選ぶなんて……」

「どうして影だとダメなんですか？」

「……知らないのかい？」

「はい」

「影の能力は、自分の影を自由自在に操れる能力だから、ゲームの運営が始まった初期には人気があつたんだよ……だけど、熟練度を上げるために必要な経験値が炎の約千倍、闇の三倍であるために誰も使わなくなつたんだよ」

「はあ？」

「……本当に知らなかったのか……だから、毎日三時間プレイして一年経つても熟練度レベル10にも届かないから誰も使わなくなつたんだよ」

ちなみに熟練度100が最高だ。

「……………それは本当ですか？」

「ああ、それも初期に使える魔法もたいしたことねえし……それなら、自分の従者に『影』の魔法を使える奴をいれた方が楽だから、自分で使う奴はいなくなつたよ」

それを聞いて……若干、焦る。

目の前の、この人は事前にある程度《トラスト・オブ・テウルース》について調べてきたのだろう。

僕が知っていることと言えば、魔法について……それも少しだけとお金などについての予備知識。

それと、この《トラスト・オブ・テウルース》ではNPCを自分の従者として仲間にし自分だけのオリジナルパーティーを作れること。従者にできるNPCの最大人数は6人であり他のゲームとは比べ物にならない程、多い。

ただし、従者を作るのには共にかかなりの時間、冒険して信頼度をMAXまで高めてから、キャラの専用イベントを攻略しないといけないらしいから、6人の従者を持っている人はカンストプレイヤーとして尊敬されているらしい。それも強力なキャラになればなんと信頼度の上昇は上がりにくいと聞いていたけど魔法もとは……

「悪いことは言わねえ。アバター作り直せよ」

目の前の男は本当に良い奴なのだろう。

見ず知らずの人間にこんなことを言う奴、普通はいないし。

「ありがとう。だけど、少しだけ遊んでからにする」

「そうなのか？」

「どうせ、消すならある程度、戦闘が上手くなってからにする」

「ああ、そういうことか」

ようは剣の動かし方とかの練習をする。どうせ消すデータなら何度死んでも構わないし。デスペナルティも怖くない。

「それじゃあ」

「ああ、頑張れよ」

そう言って、イケメン勇者風の男と別れた後　僕はじゃんけん大会でNPCを相手に破格の500連勝してしまうのだった。

とりあえず、賞金を受け取った後、武器屋で剣を買おうと思っていたら知らないプレイヤー達に取り囲まれた。

おそらく、僕の持っている1億エルが目的だろう。そうでなければ初心者の僕と一緒にプレイしよう　などとは言ってこない。

第一、強力な従者の数は決まっており、それをプレイヤーたちは日々奪い合っている。

わざわざ、ライバルとプレイしたがる人間はいない。

誘いを何とか断り続けた結果　今までにないほど疲れてしまった。

時刻もちょうど昼だったこともあり一度、現実に戻ろうとしたその時、ステータス画面にある文章が浮かび上がる。

『世界が滅びる可能性があります。危機から脱出するためには、あなたが一人犠牲にならなければなりません。現実の家族や友を守るため、あなたは世界でただ一人犠牲になっていただけますか？』

読み終えた後に『YES』or『NO』というボタンが現れる。この文章を見た途端、僕は飛び上がりそうになった。

これはおそらくイベントだろう。

それも『勇者系』の。

説明書に書いてあったんだけど、従者獲得のためには『勇者系』
『魔法使い系』『冒険者系』『町人系』『商人系』などと言った別
々のイベントを初めにこなす必要がある。

その中でも『勇者系』は滅多に出ないイベントらしい。

1億エルも手に入れてしまった以上、このまま『影』のアバター
で行こうと思っていた僕は先ほどの疲れを忘れて、喜んで『YES』
ボタンを押した。

すると『世界を救ってくださいありがとうございます。あなた
の勇気を我々は無駄にしません。せめてものお礼に我々の祝福をあ
なたに授けます』という文字を読み終えた瞬間、僕は意識を失うの
だった。

01・サバイバル

「……最悪かも」

あたり一面の木々と湖を見てそう呟かずにはいられない。

僕がさっきまでいたのは《トラスト・オブ・テウルース》のゲームの中だ。

正確にはVRMMOの擬似空間みたいな所の中な訳だけど。

これがゲームの演出か何かだったのならば、僕は喜んでプレイを続けていただろう。

だけど、これがゲームでないのは簡単に確認できた。

まず、ステータスと呟いても、自分のステータス画面が表示されない。

次に頬を捻ったところ痛みを感じた。これは五感のほとんどをゲームとリンクさせるVRMMOでは禁忌指定されていることなので絶対にありえない。

最後に目の前にある湖で顔を確認したところ、気弱そうな十五歳くらいの子が水面に映った。それは僕が《トラスト・オブ・テウルース》の中で設定した顔ではない。まさしく現実世界の僕の顔だった。

いくら五感をリンクできるVRMMOでも、ここまでリアルに僕の顔を再現することはできないだろう。

しかし、服装は《トラスト・オブ・テウルース》で着ていた綿でできた上下とも茶色い村人の服。

本当ならこのような状況に陥ってしまった場合、取り乱して自滅

してしまうのだけど生憎、それは僕にはなかった。

なぜなら一度、同じような状況に陥っているから。

祖父のホテルに就職した時、アメリカで修行したと言っていたが、あれは拉致されてアメリカで修行したとも言える。

大学の卒業と同時に黒服のアメリカ人に捕まり携帯などの連絡機器を全て取り上げられ、日本語が誰にも通じない環境に放り込まれたのだから。

唯一、渡されたのは皮肉にも英語が苦手な僕に対しての嫌がらせとしか言いようがない英和辞書機能がついた電子辞書。

あの時は錯乱状態になりホテルで物をひたすら破壊してしまった。自分で言うのも何だけど、それを一週間くらい続けて、やっと平常心を取り戻した。

そこで初めて電子辞書で単語を調べながら僕を連行した人の意図を聞き、祖父が『修行して来い』と言ったことを把握したのだ。

あの時、思ったことはどのような状況下でも冷静でいなければいけないことだ。

もし、あの経験がなければ間違いなく、ここで僕は暴走して死んでいたかもしれない。

なぜ、ここに来てしまったかは　あのメッセージが原因だろう。若返ったのは、あの時、祝福を与える　と書かれていたことが理由なのかもしれない。

あの文章からすると……僕は現実世界に戻れない可能性がある。

家族と友人を救うための人身御供。

錯乱するとか、落ち込むのは拉致された時のように、いつでもできる。

とりあえず、それらをするのは生きていける環境が整ってからだ。

まず、水の確保。目の前の湖で大丈夫だろう。鹿らしき動物が飲んでいたし。

次にたんぱく質の確保なんだけど。これが厳しい。現代で生きていた僕が狩りなどできるはずがない。

できるとしても護身術で習った合気道くらいだ。また、拉致されるのが嫌だったから……

合気道で獣を狩れるとは考えにくい、というより僕の合気道はそこまで、上手くないし。

なら、もう一つの可能性にけるしかない。

「影……」

そう言っても何も起きない。

現実であの文章が送られて来なかったのに、もし突然、送られて来た理由があるとすれば《トラスト・オブ・テウルース》の中だったから。

それなら、《トラスト・オブ・テウルース》の魔法が使えるかと思っただけ……

「あつ」

そうだ。

僕、《トラスト・オブ・テウルース》で魔法を使っただけじゃない。それどころか、基本的な指導さえ受けていない。

本当なら、じゃんけん大会の後に魔法に関する基本チャートを受けに行く予定だったから……

「待てよ……」

僕は目を閉じて影の中から金貨を一枚、取りだすイメージを持つ。

案の定、影の中から金貨が一枚、出て来る。

どうやら、影の魔法は使えるようだ。さらに、影の中に入った1億エルも入ったまま。

もし、ここでエルが使えるれば僕は飢えることはありえないだろう。けど今は森の中にいる。お金 何て使える訳がない。

改めて実験を始める。

まず、剣をイメージして剣が影から飛び出す風にイメージを付け加える。

そうだな……

シャドー・ソード
「影の剣」

案の定、剣が出て来た。

僕はそれを掴んで立ち上がると影から細い影でできた紐のようなものが伸びているのを見つける。これが剣の柄の部分に繋がっているとところを見るとおそらく、これが切れれば剣は消えるのだろう。

僕は思い切って影でできた黒い剣で紐を切ってみた。

紐を切った所からボロボロと影の剣は黒い粒のようなものになって霧散した。

シャドー・ソード
「影の剣」

もう一度、剣を取りだし今度はあたりの木に向かって斬りかかる。すると、僕の斬り方が悪いのか剣が脆いのかは分からないけれど木にちよつとだけ傷をつけただけで砕けてしまった。おそらく理由としては両方だろう。

次に

シャドー・ランス
「影の槍」

次は影から直接、槍が木に飛んで行く感じにイメージする。

すると、影の黒い槍が木に向かって飛んでいき木の半分くらいまでは先が刺さり消えていった。

やっぱり、熟練度1だったから強度がないんだろう。

それから、色々な実験をして分かったんだけど影の魔法は確かに使い勝手も良いし相手に自分が影の魔法使いだとばれない限り戦略上、色々なことができる。不意打ちなんかもできるし。

ただし、熟練度が低いせいか影は脆いし使える魔法は剣、槍、楯を作る魔法だけ。もしかしたら、もっと強力な魔法があるのかもしれないけれど、それを調べることは今の僕にはできない。

だけど、魔法が三つも使えたんだ。物凄く嬉しい。誰かに見られたら恥ずかしいから表面には出さないけど。

何度か、動物を狩ろうとしたけれど大抵の動物は足音だけで逃げ出してしまうため、狩り初心者の僕では歯が立たない。

いくら、十五歳に戻ったと言っても僕は運動音痴だったし……

仕方がないので、影で槍を作り木の実を落として、それを食べた。その時点で、まだあたりは暗くなり始めたところだったけど、見ていないだけで下手をしたら、肉食獣がいるかもしれないので一端、木の枝を集めて火を起こそうとした。

正直に言ってこの時ほど、なぜ、炎の魔法を選択しなかったのか？ と後悔した。

次の日の朝、未だに眠っていた鹿を影の剣で一匹仕留めて食べようとしたけど……生き物を殺してしまったことで吐いて、それどころではなかった。人間を殺した訳でもないのに……僕って、やっぱり、ヘタレなのだろうか？

しかし、行き残るためにはここでも吐いている訳にはいかない。だから、一時間ぐらい経つと必死に気を強くもって僕は影で剣を作って鹿の肉をさばいた。

それから、昨日と同じように火を起こして焼いて食べた。

その後、血の匂いに引き寄せられて肉食獣が来たら困るので、とりあえず人里を目指して歩くことにした。

鹿の肉と木の実の影の中に保管して。

本当なら身体と服も洗いたかったけれど、洗っている最中に獣に來られたら、最悪なので森の外に出ることを優先した。

僕が森の中に入るとすぐに、身長179センチの僕の膝くらいの高さの小人のような奴が一匹、現れた。その身体の色は緑色でそれなりの大きさの石を棒の上につけた武器を持っている　ゴブリンという奴だと思う。

《トラスト・オブ・テウルース》モンスターは魔物を倒し、ダンジョン迷宮を攻略していくゲームだったので、こいつが、ここに現れてもおかしくない。

未だに向こうは、こちらに気づいていない。

このまま、やり過ぎれば……と思った時、背後でカサツという音と共にウサギが現れた。

その音でゴブリンはこちらに気づいてしまう。

仲間と呼ばれる　と思ったが、どうやら服装が村人のものと同じせいか、勝てる、と思ったのであろうゴブリンが突っ込んできた。

できれば金貨をあげるから帰って欲しいところだ。
しかし、魔物相手にそんな交渉ができるはずもない。
僕は殺されたくない一心で

シャドー・ランス
「影の槍」

自分の影からゴブリン目掛けて影の槍を放つ。
昨日、散々、森で鹿やウサギ相手に練習したおかげか 何とか
ゴブリンの胴体に当たりゴブリンはその場に倒れ込む。

おそらくは即死だろう。

そう分かってても、なぜか、鹿の時のように吐かずにいられる。
剣の時のように直に感触が伝わってこなかったせいか、感覚が麻痺（まひ）してきたかのどちらかだろう…… できれば前者で合つて欲しい。

未だに完全に元の世界に帰ることを諦めた訳じゃあないんだ。

肉食獣がいなかったのは、もしかしたらゴブリンがいたせかいもしれない。そのところは後々、考えていこう。

ゴブリンがいた場所まで行きゴブリンの足跡がない方へ足を進めて行く。

シャドー・ランス
影の槍は相手に当たっても、当たらなくても剣のように紐がついていない分、僕から5メートルほど離れたら消えてしまうし、一回に一振りしか作れない。さっきは不意打ちみたいな形で勝ったけれど接近戦になって影の剣で戦って勝てる保証なんて、どこにもない。それどころか、死ぬ可能性の方が遥かに高い。

街へ行けばお金になったかもしれないゴブリンの装備や身体の一部を手に入れなかったのも、ゴブリンの匂いなどが身体や服について、他のゴブリンが仇討ちのために襲ってくることを避けたかった

からだ。匂いで分かるとも思えないけれど慎重に行動できる時はしておくにこしたことはない。

それから、太陽が真上に来る頃まで歩いていると、ついに道らしい道に出た。

もちろん、コンクリートなどで整備されている訳ではないけれど馬車か何か通るのだろう。じゃり道になっている。

僕はその道の先をずっと見つめてみた。

現実世界では目は良くなかったけれどゲームの中と同様にこちらに来て眼鏡がなくても見える。

そして、片方にうつすらと街があるのが見える。

ここから見えるということは、それなりに大きい街なのだろう。

僕は歩き出そうとした時、ついつい石に足を取られて転んでしまふ。

「痛っ……」

じゃりの道で転ぶのなんて何年ぶりだろうか？

「え？」

たまたま、転んだ時にポケットの中から一枚のカードが僕の顔の前に飛び出した。

そのカードには『翔・吉田』と確かに書かれている。

僕の名前が書かれているのに、なぜか一切他の文字は読めない。

もしかしたら、これは身分証明書的一种なのかもしれない　　と思つた僕はとりあえず、影の中に仕舞い込んだのだつた。

02・異世界の通貨

日が暮れるまでに何とか着いた街の門のところには数人の人達が街に入るために並んでいた。

おそらく身分などを確認しているのだろう。その光景を見た瞬間引き返そうかと思ったけれど見せているモノを見て引き返すのをやめた。

なぜなら、先ほど転んだ時に拾ったカードを皆、門番に見せていたから、未だに何が書かれているのか分からないけれど、これを見せれば入れるだろう。

そう思い、門に近づいて行く。

近くで見ると、この街、そうとう大きい。

もしかしたら、主要都市なのかもしれない。

それから、先に街に入ろうとしていた人の後に並んで門番に通してもらえるのを待つ。

門番は今の僕よりは歳上だけど、そこまで老齢というほどでもない。おそらく新米だろう。

「街に入りたいのですが」

「身分を証明するものは持っているか？」

「はい」

そう言つて、先ほどの門の中に入って行った人達と同じようにカードを見せる。

「ギルドカードだな。入っていいぞ」

どうやら、これはギルドのカードらしい。

「ありがとうございます」

礼を言っ、門の中に入る。

門の中は、もう夕方なのにも関わらず、それなりに賑わっていた。幅10メートルくらいの大通りの両脇には所狭し、と露店が並んでいる。

ゲームの中ならオブジョエとして食品を売っている店は有っても、ここにある露店のような様々な種類の物は売っていない。

正直に言えば腹が減っているので、今すぐにも露店で売っている棒に刺さった焼き肉を買いたいんだけど、まずは露店を見て周る。そして買い物をしている人を探す。

この世界の通貨がエルとは限らないから。

それで、お金の交渉をしていそうな主婦っぽい中年の女性の人がいたので、主婦と野菜を売っている店の親父の会話を、さり気なく近づいて行き話を盗み聞きする。

「これが半銅三枚？ 高い、二枚」

「奥さん、祭りの時と違って今はそれなりに物価が元に戻っているんですぜ」

半銅？ 予想が外れて通過はエルじゃないのか？

ゲームの中でのエル貨幣の価値は銅貨が一枚で1エル、銀貨が一枚で銅貨の百枚分、金貨が一枚で銀貨百枚分、つまり、銀貨は100エル、金貨は1万エルということになる。

僕が手に入れた1億エルとは、つまり金貨一万枚だ。

「この量のお肉が1エルなのよ？」

「……分かりましたよ。二枚でいいですよ」

今、確かに『エル』という単位を言った。

よし、やはり、通過はエルなのか。

あの半銅ということ単語が気になる。

もう少し調べよう。

さっき、エルを使つたのは肉だとあの主婦っぽい人を言った。つまり、肉を売っている店ではエルの銅貨を扱っている可能性が高い。

とりあえず、肉を売っている露店を探す。

探している露店は結構、簡単に見つかった。

やはり、どこの世界でも肉というのは、人気の食材なのか、それなりに人が集まっていた。

人ごみに紛れて取引している現場を見たけど、やっぱり、あれはエルだ。《トラスト・オブ・テウルース》で使われている貨幣と同じ。

なぜなら、金貨と同じ柄だから。製作会社の手抜きなのか全部同じ柄だ、と聞いたような気もするし。

そうと決まれば、僕は一刻も早く休むべく宿を探すことにする。

昨日、魔法を使って気づいたのだけど魔法を使うと確実に肉体ではなく精神が疲弊する。気分が沈むのではなく、疲弊する。何もしたくなくなるのだ。それに気づいたからこそ、昨日、早く寝たけれど、やはり現代の日本人である僕からすれば野宿では完璧にリラックスして休めなかったようだから今日もできるだけ早く休みたいのが本音だ。

周りに話しかけやすそうな人を探す。

すると、今の僕と同じくらいの年齢の女の子が買い物籠を片手に歩いていた。周りの人と同じ碧眼の女の子。瞳が垂れ目で、おっとりとした雰囲気的美少女さんだ。肩の少し下くらいまで伸ばされた

金髪が良くはえる。

見た目で性格を判断するのは良くないことだけど、あの子がキツイ性格の子だったら何かショックを受けると思う。

僕は彼女に話しかけると決めると足早に彼女に近づいて行く。

「すみません」

「はい？」

声をかけて見て分かったんだけど、やっぱり、この世界の言語は日本語じゃないみたいだ。

門番の人や、あたりを歩いている人達の会話している口を見て、可笑しいとは思っていたんだけど、彼女の口の動きを見て確信した。

なぜ、僕には、日本語に聞こえるのかは分からないけど、自分にとって都合の良いことは無視しておくことにする。そんなことよりもしないといけないことは山積みなんだ。

「僕は旅をしている者なのですが、今晚泊まる宿を探しているんです。宿はどこにあるか知っていますか？」

「どんなところを、お探しですか？」

にっこり笑って、そう言ってくれる。

良かった、見た目通りの人だったみたいだ。

「見た目通り、そんなに裕福な者ではありません。が、貧窮している訳でもございません。普通の宿に泊まりたいと思っています」

本当は金貨を一万枚持っているから裕福なんだろうけど、どこの誰が、僕と彼女の会話を聞いているか分からないから、こう言うておく。

僕の影の魔法では、たぶん、ある程度、戦いに馴れている人には無力だから。

だって、僕の影からしか攻撃が出せないんだから。

「そうですか。それなら、あたしの家が宿を営んでいますので、そこで良ければ案内いたしますよ?」

心の中でガッツポーズをとってしまう。

彼女の身なりは豪華ではないけれど、他の人と比べて劣っている訳ではない。

それなりに儲かっている宿屋の娘さん　　なんだろう。それなりの宿屋に泊まりたかった僕からしてみれば幸運としか言いようがない。

「お願いしたいのですが、見たところ、まだ、買い物途中なので、僕はそこの露店の隣で待っています」

「いえ、大丈夫ですよ。買い物は終わっていますし、お母さんにお客様をお待たせした　　なんてばれたら、それこそ、怒られちゃいますから」

そう言っ、彼女は僕を自分の両親が経営する宿に案内してくれる。

道すがら、ふと首輪みたいな物をつけられた人間が鎖に繋がれて歩いているのが見えた。周りの人達は彼らを汚物でも見るような目で見ている。

「ん?　あの、あれって……」

「あ、あれはですね……奴隷です」

最後の言葉を言った時、明らかに女の子の瞳は曇った。

僕が知っている限りでは《トラスト・オブ・テウルース》に奴隷制度はなかったはずだ。

もちろん、僕はイベントを一つしかこなしていないから実際のところは分からないけど……もしかしたらレアな従者を得るイベントの中に奴隷が関係しているものがあるのかもしれない。

僕が珍しそうに奴隷達を見ていると、女の子は僕を不思議そうな目で見てきた。

「……奴隷が珍しいんですか？」

「あ、うん。僕のいたところでは人身売買は禁止されていたからね」

「……そうなんですか。……もしかして、極東の方にあると言われる、黄金の島から来たのですか？」

黄金の島？ 確か、昔の日本がそう言われていたような気がする。そういえば、《トラスト・オブ・テウルース》を購入する時に一度だけ見た掲示板に近々、カンストプレイヤーでも攻略が難しい迷宮^{ダンジョン}の国が新しくできるって見たような……一応、《トラスト・オブ・テウルース》の舞台は地球の大陸の地形を使っているらしいから日本があってもおかしくない。

一応、普通のプレイをする分にはマップにあるのはヨーロッパだけなんだけど。

でも、この世界も地球と同じ地形だとしたら……街を見た限り文明レベルは中世くらい。

だとしたら、ほとんどの人は日本に行ったことがないはず……その出身にすれば何かと都合が良いかな？

「うん。正確には黄金の島ではないけれど、極東から来たんだ」

「そうなんですか。あたし、この街から出たことがなくて、ちよつと外の世界に憧れているんです。もし良ければ、後で話を聞かせてくださいね」

それを了承して、再び、歩き出す。
だけど、奴隷か……

彼女に連れられて来た宿屋の建物は案の定、きちんとしたものだった。それも木造ではなくレンガで立てられている。

彼女は気軽な感じに扉を開けて、入って行く。
当然だけど、ここは彼女の自宅なんだから彼女が遠慮する必要なんてない。

「あら？ アニーが男の子を連れて来るなんて珍しいね」

中に入った時、カウンターにいた、おばさんがそう言うてくる。
おそらく、この人が僕をここまで連れて来てくれた少女 アニーのお母さん、つまりはこの宿の女将さんなんだろう。

「お、お母さん。この人はお客様だよ」

「え？ そうなのかい？ お客様、ごめんね」

「いえ、気にしていませんよ」

アニーと呼ばれた僕をここまで案内してくれた少女は、僕に一礼してから、買い物籠を持って奥に入って行った。

「じゃあ、改めて、いらっしやい。食事なしで一泊、50エル。一週間は一日分割引で300エルだよ。長期滞在の場合は相談だね」

これは思わぬ収穫をもらってしまった。
この世界でも一週間は七日のようだ。

「では、一週間をお願いします。後、食事も」
「分かったよ。300エルと一週間分の食費だけど、朝夕の二食で
一日、5エルだから合計335エル」
あさゆう

そう言われたので僕はポケットの中に入れておいた金貨を一枚取りだす。

影に入れておけばスリなどにあう心配はないけれど、この世界に影の魔法がなければ、目立ってしまう。

奴隷制度があったように魔女狩りのような文化もあったら僕は間違いない魔女に認定されてしまうから、今は使わない。

それにしても一泊、五千円。この世界においての値段はどうやら現代の日本よりも遥かに低いようだ。

「ほう、あんた、貧乏みたいな姿なりしているけど、もしかしてお金持ち？」

「いえ、たまたま持ち合わせが金貨しかなかったもので」
「そうなのかい？ まあ、こっちとしてはお金を払ってくれる客は泊めるそれだけだね。それじゃあ、ちょっと待ってね。銀貨96枚なんて、カウンターには置いてないんだ」

そう言って、金貨を持って奥に戻る女将さん。

別にこれはおかしいことじゃない金貨一枚は日本円で言えば百万円相当だ。高級な店じゃない限り、96万円ものおつりを置いていないだろう。

というより、金貨での支払いを拒否されなくて良かった……露店とかだったら間違いなく拒否されていただろうから。

それから十分ほどして、女将さんが袋を持って戻って来た。

二つの袋をくれた。一つには銀が、もう一つには銅が入っていた。

「数を数えておくれ」

「はい」

おそらく数は合っていると思うけど、一応、数えて見る。

数が合っていたのを僕が確認した後、女将さんはアニーさんと呼び、僕を部屋までアニーさんに案内するように言う。

僕は部屋の鍵を受け取り、アニーさんの後に続く。

「アニーさん？」

「は、はい、何ですか？」

「いえ、まだ自己紹介していませんでしたから。僕の名前は翔です。これから一週間、よろしくお願いします」

「こ、こちらこそ、ご利用いただき、ありがとうございます」

少し緊張している様子だ。

もし、ここで僕がこの世界のことを質問したら、答えてくれるかもしれないけれど、後々、我に戻った時に、なぜ、僕が常識を質問したのか、疑問に思うはずだ。

この世界のことは何も聞けないかな……

「先程、聞き忘れてしまったんだけど、夕食はどこでとつたらいいの？」

「ゆ、夕食は受付の隣の部屋が食堂になっています。食堂は宿泊しないお客様も、ご利用しております」

「食事の時のマナーとか決まり事とかある？」

「はい？」

「あ、この宿での決まりごととかがあったら教えて欲しいな」

「朝食、夕食をご予約されたのですか？」

「うん」

「それでしたら。食堂に入る前に受付にいる母に食券をもらってください。それを食堂にいるウエイトレスに渡せば料理を運んでくれます。飲み物はお酒以外でしたら飲み放題です」

「お酒だけは、別料金？」

「は、はい」

「そっか」

やっぱり、この世界の常識を知るためには教師役の人がいる。いくら、極東から来た　という設定を使っても、自分が来ている国の名前も知らないのはおかしすぎるから。

これは明日、本格的に考えよう。

「こ、ここが、カケル様のお部屋になります。お部屋を出る際、貴重品などは持って出てください。部屋内で盗難がありましても、宿側は責任を負いません」

「うん。分かった。ここまで案内してくれてありがとう」

そう言って、僕は袋から銀貨を一枚取りだして彼女の手に渡す。

「え？」

そこで初めて宿に帰ってからアニーさんの仮面が一瞬、外れた。

「ん？ チップだけど」

一万円のチップ、なんて普通はありえないだろうけど、今回は出し惜しみするのは得策じゃない。

何かボ口を出した時、払いが良い人間なら見逃してもらえることが多い。身も蓋もない話しただけど店の人間は払いの悪い人間より良

い人間の方の味方をしたがる。

「こ、こんな額のチップ受け取れませんっ」

確かに僕は物語で言えば主人公を序盤少しだけ助ける村人に見えるだろう、そんな人間が一万円もチップを出せば僕でも慌てる。

それもアニーさんは僕が金貨を持っていたのを見ていない。

つまり、僕は見た目通りそんなに裕福ではないけれど貧窮している訳でもない普通の人の設定のままだから。

僕が海外で修行している時でも一万円もチップを出す人は一部のお金持ちか芸能人くらいだろう。それも僕のようなぱつとしない男に渡すのではなく綺麗なお姉さんに男が渡すことが多い。

それにしても、この世界にもチップという概念があって良かった。これで色々やりやすいことが分かった。

「気持ちだから、気にしないで」

「っ!?!あの.....その.....」

顔を真っ赤にして、おどおどしているアニーさんに

「じゃあ」

そう言い残して、僕は部屋の中に入る。

「ふっ」

ため息をついつい、ついでしまう。

ここまでかなり意識しないようにしていたけれど、かなり緊張していたから、気を抜ける場所に入ると一気に疲れる。

僕はベッドに一気に倒れ込んでしまうのだった。

03・買い物への道

「カケルさん、カケルさん、後、少しでラストオーダーのお時間ですっ」

扉が、どんと叩かれる音がする。

その声のおかげで、目が覚める。
しまった。

ベッドに倒れ込んだ後、そのまま寝てしまったのか。

声の主は、おそらくアニーさんだろう。

それにしてもさんか。様よりは少し親密になれた　ということかな？　まあ、お金を渡して親しくなるとか、少し虚しいけれど。

僕は急いで部屋にあった鏡で寝癖がないかどうか確認して、部屋の扉を開ける。

「教えてくれて、ありがとう」

「い、いえ……」

俯いて、顔を赤くしている。

もしかして、僕がアニーさんに好意を寄せているとチップで勘違いされてしまったかな？

二十代も後半になった大人が十代の女の子を騙したみたいで少し後ろめたいな……あれ？　今は十代の身体だから、僕も十代になるのかな？

「それで、その……あたしも席を、一緒にいいでしょうか？　もうラストオーダーのお時間ですので、あたしはお暇をいただけるんです」

「ん？ 構いませんよ」

「あ、ありがとうございますっ」

それから受付に向かうと、なぜか、女将さんがにやにやしていた。これは完全に勘違いされてしまったな。女将さんにチップを渡しておくべきだったか？ いや、女将さんに勘違いされたら、余計にたいへんだったけれど。

「遅くなっちゃって申し訳ありません。夕食の食券をいただきましたのですが」

「ああ、構わないよ。疲れていたんだろう？」

どうやら、ここに来た時、僕が疲れていたのに気づいていたようだ。

さすがは旅人を商売相手にする宿屋の女将さんだ。

「それで、今日は、魚を中心に使ったメニュー、肉を中心に使ったメニュー、野菜を中心に使ったメニューの内、どれにする？」

「あれ？ どれでも同じ値段なんですか？」

「ああ。上手い事、同じ値段になるように調整しているから問題ないさ」

僕は肉よりも魚の方が好きなので、本当なら魚 と言いたいところだけど、ここは明日からの元気をもらうべく肉を選ぶ。

「お肉で」

「さすがは、がつつりとした男の子だね」

何か含みのある言い方。

横のアニーさんが顔を真っ赤にしているし……

ここで何か言った方がいいのかもしれないけれど　ラストオーダーだとアニーさんが言っていたので、ここで時間をかけるのは従業員さんに迷惑になるだろう、そう思って何も言わず、苦笑だけ返す。

「それじゃあ、この札を渡せばお肉の定食がもらえるから」

青い札をもらい食堂へと続く、と聞いた扉を開けて食堂に入る。

そこはまるで大衆食堂のような場所だった。個別のテーブルは数個しかなく、縦に長い大きなテーブルが三つ置かれている。三十人くらいは楽に入る大きさだ。

だけど、今、食堂に客は誰一人いない。

「あれ？　もしかして……」

「あ、え、えっと、今日のお客さんが早く切り上げただけですつ。本当は営業時間、終わっている　とかじゃないですよ！」

……彼女の言葉は嘘だろうから、僕のためだけに空けておいてくれたのだろう。

たぶん、銀貨一枚チップで渡したことへのサービスという意味も含まれている。

僕は食券を食堂の責任者であろう、ガタイの良い男の人に渡すとジロリと睨まれてしまった。

一瞬、「ひい」と声をあげそうになるが、なんとか抑え込む。

……もしかしたら、この人がアニーさんのお父さんなのかもしれない。それなら、この行動も説明がつく。誰だっけ娘に近づく悪い虫に良い気はしないだろう。もちろん、勘違いだけど。

そうじゃなければ、お客さんを威嚇するようなことはしないだろう。

僕が札を渡すと、すぐにトレイにおかずのがのった皿とパンの
った皿をのせてくれる。

湯気が出ていることから、今さっき作ってくれたのかもしれない。
メインの肉は、何の肉かは分からないけれど、見た限りでは美味し
そうだった。

もちろん、日本のファミレスなどで出される食事よりも見劣りす
るけれど。

アニーさんも、トレイを受け取ったのを確認すると二人で移動す
る。

僕が腰かけた椅子の対面にアニーさんも座る。
何を話そうか迷っていると、アニーさんの方から

「あの……実はあたし、チップをもらったのは、あれが初めてだっ
たんです」

少し恥ずかしそうにしながら、そう喋りかけてくれた。
だけど、その内容に少し驚いてしまう。

正直に言ってアニーさんの見た目は可愛い。

誰でもブサイクにチップをあげて仲良くなるよりも、美人さんや
可愛い子にチップをあげて、丁寧に接客して欲しいと思うのは人の
いや、男のさがだろう。

もちろん、僕だって、同じように接客してもらえるのなら、可愛
い子に接客してもらいたい。

「そうなの？」

「はい。あたし、あまり接客する機会なんかなくて……」

「僕にはきちんと普通に接客できていた　と思えたんだけど？」

これには、先ほども驚いてしまう。

確かにアニーさんは緊張していたけれど接客していた時の様子を感じだす限り、ある程度、馴れている、思った。

「何度も頭の中で練習していたで、そう言っただけだと嬉しいです」

彼女のはにかむ様子は年頃の女の子特有の可愛さがあった。言うなれば美人な人ではない近寄りやすさ、かな？

彼女を見ていると、学校の教室にいた学年一の美人さんよりも、フレンドリーで誰とでも話すそれなりに可愛い女子の方がモテていたことを思い出す。今の彼女は後者の子と少々かぶってみえる。もし、僕が同じ歳なら迷わずアタックしていただろう。

「……あ、後……実は相当、緊張してしまっていて……へ、変なこととは口走っていませんでしたか？」

そこで、ピンときた。彼女がなぜ様なんてつけていたのか。

緊張していたから様なんてつけてしまったんだ。

彼女はお客さんに普通はさんをつける人なんだ。

緊張している、と普通に話しているつもりでも、時々、変なことを言ってしまったり、噛んでしまった経験くらい誰にでもあるだろう。

……自分が特別扱いされているのかも、と勘違いしてしまっていた自分が恥ずかしい。

「ん？　そういえば、宿屋の娘さんなのに、接客をしないの？」

「はい。宿は弟が継ぐことになっていきますので、あたしは花嫁修業を兼ねて厨房で働いていたり、お部屋の片づけなどをしているんです」

「そうなんですか。実は僕の祖父も宿を営んでいたのですが、見事に後継者から外れてしまいました」

「まあ、それで旅を？」

「ええ」

「あたしも、チップをもらえたので、今度、父に街の外に連れて行ってもらえるんです。どんな形でもチップをもらえるまでは外に出たらダメって言われていたんです」

アニーさんがそう言った瞬間、厨房から殺気が……そうか、それでアニーさんは裏方の仕事を主にやらせていたんだ。

好奇心旺盛なのは、今のアニーさんの笑顔を見ても分かる。だけど親としてはモンスターの出る街の外には出たくない。

だから、あえて宿を継がないのを口実にアニーさんを裏方に徹しさせた。

そうすればお客さんと接する機会がなくなつてアニーさんを街の外へ出さなくてもいいから。

おそらく、美味しい料理を出せばチップがもらえるかも　などと言っておいて、アニーさんにチップが渡らないように操作していたのかもしれない。

少しアニーさんの両親には悪いことをしてしまったかな？

それにしても、宿屋を継げなかったから極東から旅をしている、というのは思いつきの設定だけど、これはなかなか良い設定かも。

これなら極東から旅をしている説明がつく。

後は世間を見て知識を広めるのが目的と言っておけば完璧じゃないか？

僕はそれからアニーさんと取りとめのない話しをしながら夕食を食べて進めていくのだった。

次の日になり、僕はそうそうに朝食を食べ、街へと出かける。
今日はある買い物が見たいから、早く出る必要があった。

昨日、アニーさんと歩いた道を何とか思い出して、彼らが歩いて
いた道まで足を進める。

昨日のアニーさんの雰囲気から、できれば、売っている場所を街
の人に聞くのを避けたい僕としては足で探すしか方法がない。

幸いなことに彼らは、すぐに見つかった。昨日、歩いていた人と
違うところを見ると、見せしめが宣伝かは分からないけれど、扱っ
ている人数は数人ではないのだろう。

後をつけてみると、彼らが入っていたのは少し寂れているが、
それなりに大きい店だった。

僕は周りに誰もいないのを確認してから店の中に入る。
すると、案の定、屈強な男が受付らしき所に座っていた。

だけど、僕の目的は、おそらく、この店ではない。

僕が入って来るのを見た男はめんどくさそうにしながら、首を回
しながら僕に問いかけて来る。

「身売りか？」

どうやら、自分で自分を売ることもできるみたいだ。

しかし、客だとは思わなかったんだろうか？ まあ、僕の外見じ
やあ、仕方ないか。

「いえ、少し、お話しが」

それを聞いて、さらに機嫌が悪くなる男。

そんな彼に僕は近づいて行って、そつと銀貨を一枚、差し出す。すると、男は僕の顔を一度見てから、意味を理解したのだろう。急に態度を変える。

「おつと、すみませんね、お客さん」

「いえ、それで今晚、お酒でも飲んでください」

昨夜の間にアニーにお酒の値段は聞いている。だいたい、店でビールを飲むと半銅、4枚らしい。半銅というのは10枚で銅貨一枚の価値らしい。

渡したのは銀貨なので、おそらく男の頭の中は天国だろう。

「それで話なのですが」

「ええ、何でも、お聞きください。奴隷をお買い求めですか？」

急に態度を変える男に苦笑しそうになってしまう。だけど、こういう男の方が扱いやすいから、良かった。

もし、頭のキレる奴なら、どうしようかと思った。

こういう輩は、お金さえ渡しておけば約束はそれなりに守るはずだ。

「で、聞きたいのは、この街で奴隷を売っているのは、ここだけですか？」

「いえ、いえ、滅相もない。ここは、あくまで売れ残りを安く処分するような場所です。お客様のようの方が来るところではございません」

やっぱり、これも昨日アニーさんに聞いてのだけど、僕がいるのはエクストラという国の中でも三番目に大きい街　アネットだそ

うだ。そんな大きい街の奴隷を売っている店がこんな寂れているはずがない。

「そこへの道順とその支配人の情報を」

すつと銀貨を渡す。

男はへらへらと笑いながら僕の銀貨を受け取って、道順をすらすらと紙に書いていく。屈強な男の割に絵が上手い。

「支配人は領主様とも繋がる権力者でさ」

「普通に行って会えるかな？」

「無理でさ」

「会える方法は君と同じかな？」

につこりと笑うと僕は銀貨をポケットから取り出す。

「へい」

その返事と道順を記した紙を受け取ると僕は銀貨を渡しながら

「ありがとう。今日、僕はここに来なかった。いいかな？」

「へい。この時間は誰もいやせませんでした」

そう言って街へと戻る。

今は奴隷を買うつもりだけど、交渉で失敗したら買わない可能性もあるからな。僕が奴隷を求めている、という情報は最低限にしておいた方が良く。奴隷を購入できる　ということは金を持っている証拠なのだから。知られないにこしたことはない。

僕は紙に記された場所に向かう。

そこは、どこの貴族の屋敷だ、と言わんばかりに豪華な洋館だった。

しかし、人通りは、さきほどの店があった場所よりも少ない。明らかに、この建物の周辺に誰も近寄っていない感じた。

隣の家も壁に蜘蛛の巣がはってあって、とても生活しているとは思えづらい。

僕は大きな扉を開けと中に入る。

中には武装した兵士みたいな男が扉の横に立っていた。

その男たちを一瞥しながら、三つある受付を見してみる。

三人とも女の人　これなら、誰に話しかけても問題ないだろう。

僕は右端にいる水色の髪をポニーテイルにしている美人さんと話すことにした。

「すみません」

「いらつしやいませ。今日はどのような奴隷をお探しで？」

奴隷、そうストレートに言われてしまうと、若干、帰ろうかと思ってしまう。

だけど、ここで帰る訳にはいけないので、僕は話を続けることにした。

「ここの責任者の方に会いたいのですが」

「申し訳ありません。支配人は」

おそらく、初回の方とはお会いいたしません、だろう。

僕は彼女が言い終わる前に三枚の銀貨をそつと彼女の手にのせる。

「……………少し、お待ちください」

よし、屈強な男の言った通りか。

第一段階、成功と言ったところだろう。
後は支配人と会えることを祈ろう。

04・二人の奴隷

「お客様、支配人の元へお通しいたします」

目の前のお姉さんは、すぐに　とはいえなかったが、支配人の元へ連れて行ってもらえることになった。

お姉さんは誰かに相談していた風だったけれど、誰に相談していたのだろう？　まあ、支配人に会えることになったので問題ない。

「ありがとうございます」

僕はにこり笑いながら受付から出て来た彼女の後について行く。

ロビーらしき部屋から奥に通された先は廊下になっていた。そこも、かなり豪華な絨毯が廊下に敷き詰められている。

正直に言って、やはり、儲かっているのだろう。

人を売って儲ける何て、現代の日本やアメリカにいた僕からしたら考えられない……まあ、今、僕は奴隷を買おうとしているから、言えた義理ではないけれど。

もちろん、背に腹はかえられないので、買わない選択肢は無いんだけど……

受付の人の後を三分程、歩くと今まで見てきた扉よりも一回りほど大きな扉があった。

案の定、そこが支配人の部屋だったのか、お姉さんはノックしてから

「支配人、お客様をお連れいたしました」

そう言っ返事をもらってから僕を連れて中に入る。

部屋の中で座っていたのは四十代後半のダンディな男の人だった。

部屋の中は廊下以上に豪華な絨毯が敷き詰められていた。もちろん、素人目には分からないレベルだけれど。

おそらく、文明レベルが中世か、少し進んだくらいであろうこの世界ではおそらく絨毯だけでもかなりの価値の物だろう。

まだ、この世界の金銭感覚を正確に判断しきれない僕では値段までは分からないけれど。

「ほう」

と、ダンディな男の人は目を細めながら僕を見定めているような感じだ。

とりあえず、僕はお姉さんに銀貨のチップをさらに二枚渡してにこりと笑い退室してもらう。

「わたしのところまで初めての来店で案内されるとは、どんな商人かと思いましたが、あなたの服装は普通の田舎の村人のような服装だ。しかし、銀貨をチップとして、あっさり渡してらっしゃる……何者ですか？」

「しがない旅人です」

そう言っ て俺は金貨を一枚、支配人に渡す。

「ほう」

「少し、お話ししませんか？」

「ええ、喜んで」

金貨を懐にしまいながら向こうもにこりと笑う。その様子は、それなりに様になっている。

「僕の名前は翔^{かける}と申します」

「おっと、これは失礼、わたしはジョゼフと申します」

「いえ、僕も入室した際に自己紹介しておくべきでしたので、お気になさらず」

「それは、ありがたい」

この人は、やっぱり、この世界で今まで会った人とは全然、違う。侮れない。アメリカで相手にした商談を持ちかけて来た詐欺師に感じに似ているし。あの時は、酷い目に合わされたからな……

「実はお恥ずかしい話なのですが、僕は見た目の通り、この国の人間ではありません。ですから、ここで扱っている商品についての知識が抜けてしまっているんです。購入する際の注意などはございますか？」

僕の外見は黒髪で黒い瞳だから、この文句は有効のはずだ。これが有効でなかった場合かなり窮地に立たされてしまうけれど。

「ほう、やはり、極東の方でしたか。それでは、こちらの奴隷制度について知らなくて当然ですな。では、ご説明させていただきます。我々の国の奴隷制度は主に罪人を奴隷として扱っております」
「罰ということ、なんですか？」

平静を装いつつも心の中では安堵する。僕は奴隷に関してだけ知らないことになった。

「ええ。死罪を与えても、結局のところは殺された人間の遺族の方には、何の補償もできませんからね。特別な魔法道具^{マジックアイテム}を使って自由を奪い奴隷として売り、その利益を遺族の方に支払う。知らない人は無理矢理、わたし共が奴隷で儲けていると思われがちですが奴

隷産業は利益よりも、まず、国民を思う王の意向なのです」

……確かに一理ある。

お金で全て解決　という考え方は好かないけれど……

そういえば、街で奴隷を悪く見ていた人達は、あの奴隷達が罪人だと知っていたのから、あんな風な視線を送っていたのか。

「それか、自身で身売りするのです。田舎の子供を口減らしの意味で売る人間もいれば、生活が貧困して奴隷となり、食物に飢える生活をするのを避けるのです。もちろん、罪科奴隷と違い、解放されることも稀にありますし。奴隷に食べ物を与えないのは罪になりますので飢えることはありません」

「そうなんですか」

これだけ聞けば、完璧に国民救済措置なのかもしれないけれど……アニーさんは奴隷達を見た瞬間、目を曇らせた。良い点ばかりではないのだろうけど、ジョゼフさんはデメリットについては語らないだろう。

今から商品売る相手に商品を卑下することはない。さて、本題に入るか。

「では……僕の欲している奴隷はいないかもしれません」

明らかに落ち込んでみせる。

僕のこの態度を演技か本音なのかジョゼフさんは見分けられていないみたいだ。その証拠に少し目付きが悪くなった。

別に値切りが目的じゃないから、実は本音なだけだね。

「どんな奴隷をお探しですか？」

「実は、探している奴隷は二人なのですが、一人は賢く知識が豊富

な者、最低条件に文字が読めることです。もう一人は接近戦でモンスター相手をできる者なのですが……罪人は嫌です。そんな都合の良い方いませんよね？ そんな方は見売りせずとも稼げるでしょうし。値段はいとわないつもりだったのですが……」

僕の言葉を聞いて、安心した様子のジョゼフさん。

本当に、この二種類の奴隷を探している。

まず、元の世界に戻るためには各地を周って情報を集める必要がある。

その時の問題点はいくつもある。

その中でも深刻な三つが 僕にはこの世界の文字が読めないこと 僕は戦闘能力が低いこと 僕が大量の金貨を所有していること。

初めの二つは奴隷以外でも、誰か人を雇えば十分補える。

だけど、最後の一つが問題だ。人間は欲深い。どこかで護衛などを雇って移動を守ってもらえることもできるが、僕が大量の金貨を所有していることが分かれば、罪人になる覚悟で僕を脅して金貨を奪おうとするかもしれない。それも僕を護衛している、ということは僕よりも最低条件、強いから僕がそうなった場合、抵抗することはほぼ不可能だろう。

僕はこの世界で頼れる知人が一切いない。もし、頼みの綱の金貨がなくなれば、僕は一気に窮地に立たされる。

だから、奴隷だ。

正直、人身売買に加担するのは多少の抵抗があるが、僕にも元の世界に戻るという目的があるんだ。手段を選んで金貨を奪われてしまったら、その目的が果たせない可能性が高い。

それでは本末転倒だ。

それなら断然、命令ができる奴隷の方が良い。

ここまでが、これからのための理由。

そして、最も僕にとって必要な情報を信頼のおけるか、おけないか分からない人からではなく、自分の管理できる人から得られることが、今の理由。僕にはこの世界の常識が欠落している。つまりは宿の代金を通常よりも高い値段で提示されても分からない。

あの屈強な男がいた場所で奴隷を買わなかったのも、それが理由だ。

今回はたまたま、アニーさんに出会って良心的な宿だったから他の客と同じ値段で泊まれたけれど、極端な話、僕のような明らかに異国の人間を騙そうとする者は少なくない。

それを回避するには常識を学ぶのが一番だけれど、普通の人に習った場合、明らかにリスクがデカイ。

その人には僕が常識がないことが知られてしまうのだから。

それが、他のことより先に奴隷を求めた理由。

未だに、残念そうな様子を続ける僕にジョゼフさんは笑顔で

「それは良かった」

と、確かに言った。

「いるんですか!？」

「ええ。カケル様は運が良い。実は一昨日、手に入れた上質な奴隷がいました。今すぐ、連れてまいります」

「あ、ちよつと待ってください」

「何でしょうか？」

「奴隷には命令ができますよね？」

「ええ。もちろんでございます。魔法道具である契約の首輪をつけ

ておりますので。あ、ですが、罪になる行為や自殺を要求すること

マジックアイテム

コーラーオブコンタクト

はできませんよ」

ふう、良かった。

ここまで来て無理だ　と言われたら、権力者とのパイプを作るだけで終わってしまっていた。

そんな僕を満足そうに見ながらジョゼフさんは執事風の男を呼ぶと、奴隷をつれて来るように指示する。

すると、執事が出て行つて一分も経たない間に彼女等は連れて来られた。

連れて来られた奴隷は、少女と、少女より少し歳の上であろう女の人だった。

少女はストレートに伸ばされた金色の髪に水色の瞳の人形のような美少女。手と足が驚くほど、白く細い。

女の人は赤い髪をポニーテイルにしている。少女と同じで肌は白いが、腕や脚は太く　もちろん、少女と比べた話しただけ。明らかに戦士風だ。いや、騎士と呼んだ方が良いのかもしれない。

何より驚いたのが、二人共、物凄く綺麗だ。

着ている服が華やかなせいか、どこかの貴族の令嬢と護衛の騎士と言われれば誰もが信じただろう。

そういう僕も二人が奴隷であることは首についた首輪がなければ信じなかっただろう。

「わたしは、これで」

そう言ってから一礼して執事風の男は退室する。

「さて、どうですか？　二人とも処女なのは確認させておりますし、賢く、強いのも保証できます」

二人の奴隷が好条件であるがあるほど、僕は疑問に思ってしまう。
なぜ、これほどの綺麗な女性が奴隷をしているのか？

「二人共、凄く満足できます」

僕の言葉にぴくりと反応する二人の奴隷。

「ただし、それゆえに逆に疑ってしまいます。なぜ、これほど上質な女の子を？」

「……やはり、カケル様は優秀な方ですね。ここで何も言わなければ話ませんでしたよ。エステマという国をご存知で？」

「ええ、話しに聞く程度ですが」

もちろん、知らないけれど、はったり。

「あの国は滅びました。馬鹿な王のために」
「誰が、馬鹿だっ！」

女の方が今にもジョゼフさんに飛びかかりそうになるが、
ジョゼフさんが一言「動くな、そして喋るな」と言うと、女の人は
動けなくなってしまう。

少女の方は唇を噛みしめている。

「戦争で滅びたのですが、戦争に負けた国の国民を奴隷にするのは
各国の条約で禁止されております。しかし、姫と騎士団の一部は亡
命を我が国に測った。別に亡命するまでは良かった。しかし貧困な
生活に耐え切れず、姫と騎士団長以外の人間が二人を売ったのです」
「は？ 他人が他人を売れるのですか？」

「馬鹿な姫と馬鹿な騎士団長が騙されたのですよ。しかし、我々と

してもお金を払った以上、商品として売らなければならない」

二人の方を見ると、話を聞くのが二人とも屈辱のようだ……いや、少女の方は違う、あれは騙されたと思っていない。むしろ、自己犠牲 ジョゼフさんの話しは半分正解で半分間違いのだろう。

「買い取りの後にこれが発覚したのです。これだけの娘です。王族や貴族に高く買ってもらいたかった。しかし……」

「戦争に負けた国の国民を奴隷にするのは各国の条約で禁止されている。つまりは大金を出してまで他国や貴族から追求されるかもしれないリスクを追う貴族はいない ということですね？」

それにしても、この世界は王政なのか。

「ええ、こちらは正規の商売をしているので何も問題ないのですが、国家や貴族は少しの油断でも蹴落とされてしまいますから、わざわざ、彼女達を買う馬鹿はいないのです」

「しかし、高く買った手前、安く売れない」

「ええ。その通りです」

「分かりました。あなた方が買った値段の三割上乘せで構いませんよ」

これは願ってもない好機だ。僕はもともと奴隷の相場なんて知らない。これなら、違法すぎる値段は提示されないはずだ。

「ほう、普通は値切りを行うのでは？」

「いえ、こちらとしては、あなたとのパイプを作ただけでも十分な収穫ですよ」

もちろん、僕の本当の思惑など口にしない。

「いやはや、カケル殿には驚かされます。分かりました。それで構いません」

「と、その前にお願いが。そちらの女性は予約という形をとらせていただいて構いませんか？」

僕はそう言つて騎士風のお姉さんの方を指差した。

騎士だった女の人なら文字くらいは読めるだろうし、一般常識の面においても姫だった少女よりも安心できるが、さつきジョゼフさんに殴りかかろうとしたところをみると沸点が低い可能性がある。もちろん、あれが彼女の譲れないモノだったのかもしれないけれど、話し合いがしたい僕としては彼女よりもお姫だった少女の方を選ぶのは当たり前だ。

それに推測だけれど姫だった少女の方にも一般常識などの知識がある、と思う。

だって、自分の護衛のために身売りするような人だ。亡命中、何かと買物などを手伝った可能性が高い。それなら、ある程度は常識も学ぶ機会があつたはず。

僕の予想が外れていたら、予定を前倒しにして騎士だった女の人を三日後くらいに買いにすれば良い話だし。その三日間の間に文字が読めるであろう姫様だった少女に文字を教わっておけば無駄にもならないし。

「なぜ？」

おそらく、ジョゼフさんもどうして僕が、とりあえず一人しか買わない理由は推測できているだろうけれど、そう質問してきた。

「いきなり、こんな身なりの人間が二人の奴隷を連れて歩いていた

ら、おかしいと思いませんか？」

それを聞いてジョゼフさんは目を見開く。

どうやら、僕のこの返答は予想していなかったらしい。

まあ、実際は服をこれしか持っていないのが原因だけど、モノは言いよう。

「やはり、その服はカモフラージュだったのですね。分かりました。両名とも三割ではなく二割上乘せの一人あたり金貨十枚で構いません」

「良いんですか？」

「金払いの良い人とモノ分かりの良い人とは長く付き合っ参りたいですからね。ぜひとも、次の機会がありましたら、ランド商会をご利用ください。ランド商会は各地にありますので」

「では」

そう言つて僕は金貨十枚を一端、渡す。

「確かに」

「それから、こちらが予約のための前金とさせていただきます」

続いて五枚渡す。

その後

「もし、彼女があなたの言つた通りの人間ではなかった場合、キャンセルさせていただきますが、よろしいですか？」

そう聞く。

それを聞いてジョゼフさんは明らかに驚いている。

「キャンセルしても、わたしがこれを返すとは限りませんよ？」
「それは僕のジョゼフさんへの信頼のお金だと思ってください」
「……いやはや、参りましたな。先ほどのチップとしていただいた一枚も予約金の中に含めさせていただきます。あなたのような方は、本当にこれからも懇意にしていきたいものです」
「そう思っていただけののなら、何よりです。奴隷の方は六日後にとりに来ます」

僕の笑顔にジョゼフさんは笑顔で返してくれるのだった。

05・似ている少女

女の人の方は先ほど、予約　という形で契約を結んでいるがこれ以上、ここにいる必要がないので、ジョゼフさんは再び執事風の男を呼び出して「丁重にお預かりしろ」と命令して退室させた。

女の人は少女と離れることに対して、かなり抵抗したようだけど、コラーオラコングタクト契約の首輪の力、つまり命令に従わせる力で従えられていた。

この首輪の力は魔法によって動いているらしいので主人となった者は犯罪行為と自殺させる以外なら何でも言う事を聞かせられるらしい。

例えば「おまえの人に知られたくない秘密を言え」と言われたら魔法によって絶対に言わなくてはいけないようになる。ただし、それは正式に契約を結んだ者のみでできることらしい。

今の状態は仮契約　つまりは黙れや動くななどしか命令できないらしい。

ただ……その首輪の効果を見ていたら、自分がつけられたら……
と思いつつとした。

が基本的にはこれは他人につけられないんだそうだ。自分の意思でつけないといけないらしい。それも、他人に強要された　例えば、誰かを人質なんかにとられた場合により仕方なくつけようとした際は効力を発揮しないそうだ。

だから、本……
に身を落とすことはないらしい。

もちろん、罪を犯した者は自分の意思以外でもつけられるが、それはこの世界の神の力を借りるらしい……この部分は良く分からない。だけど、僕は罪人になるつもりはないのでここを追求する必要はない、と判断した。

そして、今、少女の首輪と僕は契約しようとしている。

「では、カケル殿、この首輪に触れてください」

「はい」

「では、発動」

そうジョゼフさんが呟くと少女の首輪が光始めた。

眩しいほどではないけれど、驚いてビクンとしてしまう。

その後、ゆつくりと光が収まる頃には首輪に錠前がついていた
金色の小さな錠前。

「これで、契約は完了です。カケル殿が主人です。奴隷の解放は主人の意思でできますが、基本的には一生奴隷のままで構いません。それと命令したい時は、きちんと命令口調で言うてください。お願いなどでは効力が発揮しませんので」

「分かりました。それと、彼女に着せてあげる服を売っている店を紹介してもらっても構いませんか？」

「分かりました。紹介するのは構いませんが、こちらとしても、儲けが本来ない商品で儲けさせていただきましたので、オークションなどの時に奴隷を着飾る服を2、3着お譲りしましょう」

「ありがとうございます。じゃあ、選んできて」

少女は無言で僕を睨んでいる。

しかし、逆らっても命令されるだけだと思ったのか、渋々、執事風の人に連れられて服を選びに行った。

「しかし、先ほども申し上げましたが、カケル殿は一体、何者ですか？ わたしは、カケル殿くらいの年齢ではこのような得体のしれない老体を相手に交渉などできませんでしょう？ それも値切り交渉などではなく、本当の利益に対しての交渉など」

「いえ、いえ、自分など、まだまだジョゼフさんの相手にもなりま

せんよ。あなたがついた嘘なども僕は見抜くのが遅れてしまったのですから」

「……気づかれていたのですか？」

「ええ、金貨を渡す瞬間くらいに。気づくのが遅すぎました」

「まさか気づかれるとは、いやはや自信を無くしますよ。……ちなみに内容は？」

「あなたは元から、僕に彼女等売ろうと僕を招き入れましたね？」

そう、明らかにおかしい、支配人の部屋の近くに奴隷を置いているとは考えにくい。

それなら、なぜ、一分も経たない間に奴隷のそれも訳ありの彼女等連れて来れたのか？

もし、支配人が金を持っていそうだけど、明らかに王族や貴族でない男が来た　という連絡を受ければ間違いなく、彼女等売ることを考えるだろう。

彼女等なら、僕がどんな条件をだしても、応えられただろうし。

唯一の問題は僕が金を持っているか？　どうか？　だったんだろうけど受付のお姉さんに銀貨を渡すような奴が金を持っていないはずがない。

僕も向こうも得をして、なおかつ、これを告げておくことで貸しができた訳だ。

「全て分かった上で、わたしの言い値……いえ、あれはわたしの言い値ではございませんね？　あなたが出せる額でしたね。年齢詐称をされているのでは？　どう考えてもカケル殿は十代ではありませんよ」

「ええ、二十代です」

実は、いくらでも買うつもりだったんだけどね。それは言わない方がいいだろう。

「……見かけに惑わされてはいけない、と勉強になりました。残っている彼女の金貨の額を一枚減らしますので、できる限りランド商会の敵になって欲しくありません」

「分かりました。僕にランド商會が敵対などの行為を、取らない限りはできる範囲で仲良くさせていただきます。僕としても国がバックについている商會を敵に回したくないですし」

これは予想外だった。

貸しがなくなってしまうのは惜しいけれど、それだけ僕が評価されたのだから、ラッキーだ。

「ちなみにランド商會は奴隷の他に商売をされているのですか？」

「ええ。もちろんです。食物から日用雑貨まで幅広く扱っております。わたしはアネッタ支部長兼、副代表をさせてもらっておりますので、何かご入り用の際はお申し付けください。今日は、たまたま、ここにおりましたが基本的には街の中心部にある商店の方になりますので」

「そうなんですか。僕としては今日、ジョゼフさんがこちらにいらしてくれて本当に良かった」

この人が副代表なのか……これは本当に嬉しい誤算だな。そんな人とパイプが出来るなんて。

「ええ。わたしもカケル様程のお方との交渉を部下に任せずに済んで良かった。そんなことになれば仕入れ値を割るかもしれませんでした」

これは思った以上に僕の評価は上のようなのだ。

ただ僕を煽っているだけかもしれないから気をつけないことには

変わりないけれど。

「そうそう、これが先ほどの予約した女の分の証書になります。次に来る時はこれをお持ちください。あくまで便宜上の代物ですので、顔を見せていただくだけで結構ですが、こちらも契約を結んだ以上、形にしておかなければ」

「そうですか。ありがとうございます」

それを受け取った後、受付のある部屋へと再び戻って来た。

すると、五分も経たない間に、先ほどの少女は服の入った袋を持ってやって来た。中に着ている服は少女が茶色のローブを着ているために見えないが、おそらくそれなりに高価な物だろう。ローブをくれたのは、ありがたかった。奴隷の証である首輪が見えなければ彼女が奴隷であることが分かる人間は少ないだろう。

街へ出て美少女奴隷を連れて歩いていたら目立ってしまう。罪人を連れて歩くよりは反感は少ないだろうけど。

おそらく普通の男なら嫉妬してしまうだろう。

僕だって逆の立場なら嫉妬すると思うし。

「じゃあ、行こうか」

「……………」

僕が扉を開けようとすると思わぬ警備らしき人が来て扉を開けて外まで案内してくれた。

ビップ待遇という奴だろうか？

屋敷を出てから僕はすぐに路地に入り、少女から荷物を受け取る。僕に荷物をとられても、未だに少女は無言を貫いている。

僕が袋を影にしまった時にやっと反応の変化が見れた。少女は確かに驚いていた。

これだけでは魔法が珍しいのか影が珍しいのか分からない。
早く確認してみたい僕は

「ついてきて」

そう言うつと足早に宿への道を目指す。

少女も反抗したとしても命令されれば従うしかない、と分かっているようで、とりあえずはお願いでも従ってくれた。

美少女を連れているので、もちろん人の目は集めたが、道を歩いていた奴隷達を見るような目で見てくる人は誰一人いなかった。

宿に帰ると、アニーさんと女将さんが受付の所にいた。

僕が帰るのを見ると、二人共、笑顔で迎えてくれる。

それに僕が反応しようとした時

「アメリカ！？」

泣きそうな声が後ろから聞こえてきた。

振り向くと少女が瞳に涙を溜めている。

そして、唐突にアニーさんに駆け寄り 抱きしめる。

その際にローブを落としてしまった。

そのあまりにも唐突でローブが落としてしまう程の勢いに僕もアニーさんも女将さんも反応できていない。

「アメリカ！ アメリカ！ アメリカ！」

咄然とする僕達を余所に少女は誰かの名前を呼び続ける。

やっと我に返った僕よりも先にアニーさんが奴隷の証である首輪を見て顔をどんどん青くさせる。

それは驚くべき程の変化だった。

昨日の愛想の良さなんてどこにもない。

「触らないで！」

アニーさんはそう強く否定すると、同じくらいの歳の少女をまるで親の敵かたきでも見るような目で見つめながら抱きつかれている腕を強引に引き剥がし、さらに僕を睨んだ後、どこかへ去って行ってしまった。

啞然とする僕に、やっと平常心を取り戻した女将さんが少女を見ながら僕に話しかけて来る。

「……お客さん、朝からいないと思ったら奴隷を買いに行っていたのかい？」

「え、ええ」

その声に怒気が含まれていたため、焦りが隠せない。

「二人分の部屋に移動するんだね？」

「はい、そのつもりです」

何とか表面だけでも、取り繕っていたら「あたしらで用意しておくから、そのの奴隷を連れて一度、部屋に戻っておくれ。お金は後で良い」と言われた。

明らかに今までの普通の客へ接する態度ではなくなっている。

疑問は絶えなかったが、逆らえば余計に何か拗れてしまいそうだったので、とりあえず女将さんに言われた通り少女を連れてそれなりに綺麗な木造の一人部屋に戻る。

何が何だか分からなくとも、しなければいけないことに変わりはないので部屋に入ってから扉の前で放心状態で立っている少女に木の椅子に座るように促して、僕はベッドに腰掛ける。

椅子に座るように促した時から彼女は僕の方を確実に睨んでいる。

少女の方の態度も明らかに契約を結んだ時と変わってしまったている。

……このまま、何もしないのも選択肢の一つだけど、宿に泊まれる日数が決まっている分、早く事を進めたい僕は彼女と話をすることにした。

「初めまして、僕の名前は吉田翔。君達の言い方言えばカケル・ヨシダかな？」

「……………」

「できる限り命令はしたくない、と思っているんだ。名前を教えてください」

「……偽善者」

偽善者　という名前だとも考えられる。けれど、仕方ない……

「名前を教えてください」

「っ!？」

瞬間、少女の首輪が少し光る。

「アストリア、アストリア・ヴェンス・エスリマ」

「アストリア、まず、初めに言っておきたいことがある」

「……………」

やはり無言。

「僕は異世界人だ」

「っ!？」

やっぱり、反応した。

今の反応だけでは、どういう意味で反応したのか分からないけれど、顔が赤くなってきたところを見ると、少なくとも話しをしてくれそうだ。

「あなたは、どこまで、わたしを馬鹿にすれば気が済むのですの!」「ふう、やっと自分から会話してくれたね」

「その態度も、そう! どうせ、奴隷だから馬鹿にしているんでしょう! さっきのことだって、わたしを馬鹿にするためにアメリカに似た子を探してきたんでしょう!？」

しまった。

明らかに錯乱状態だ。冷静さを欠いている今なら、どんな話してもしてくれるだろうけど、それでは意味がない。命令できるとはいえ、最低限の信頼関係は築いておきたい。

「少しだけ落ち着いてくれるかな? まず、僕はアメリカという人のことを知らない。アメリカと君を馬鹿にすること 何の関係があるのかな?」

アストリアは明らかに、しまった!？ という顔をしている。

やはり、命令されない限りは何も喋らないつもりだったのか。

アストリアは口を閉じると下を向いて僕と目を合わせない。

既にちよつと話してしまっているがこれ以上は何も言うつもりはないのだろう……

「さっきのジョゼフさんとのやりとりで知っていると思うけれど、僕は君の元騎士も買うことにしているんだ。今の僕は命令すること

に馴れていない。だけど、君で馴れてしまったら僕は彼女に何か変な命令をしてしまうかもしれない」

これは少し、悪人のような手法かな？ まあ、人身売買した時点で日本から見れば十分、悪人なのだろうけど。

「卑怯な……」

「卑怯でも構わない。話をしてくれない？」

「……アメリカとはわたしの妹です。わたしの身代わりになり殺されてしまいました……」

「っ！？」

これは……完全にミスだ。

少し考えれば予測できただろうに……僕も、宿に帰って来るまでの出来事が上手くいきすぎたためにハイテンションになってしまっていたのか。

一度、目を閉じ深呼吸する。

よし。

「その子がアニーさんに似ていたんだね？」

「……ええ。先ほどの方のことを仰っているのなら間違いありませんわ」

とりあえず、僕が直接関係していないことくらい彼女も分かっているだろう。

僕が特定の誰かだから、嫌われている訳じゃないことが今の会話で分かったから、僕は当初の予定通り、話することに決めた。

「まずは、取引をしよう」

それを聞いて彼女は胡散臭そうな目で僕を見る。
これは想定内だから、気にしない。

「僕は元の世界に戻りたい。だけど、帰りが分からない。それを探すのを手伝って欲しい。僕が元の世界に帰れる時に君達は解放しよう」

「……わたしを馬鹿にするのはそろそろやめてくれませんか？」

「いや、僕は本当に異世界人だよ。そもそも、そんな取引をしても僕にメリットはない。本当なら死ぬまで奴隷にしているも構わないんだから」

「……確かにそうですね。受けておいてもわたし達に損はありません。心に留めておきますわ」

「それで、君はお姫様だったんだから、知識は一般の人よりも優れているよね？」

「あなたのお伽噺を信じるとしても　わたしは異世界への行き方何て知りませんわ。そもそも、異世界人を名乗る者に会ったのも初めてですの」

「それは、ある程度、予想していたよ。それで、さっそく質問なんだけど魔法について何か知っている？」

「……先ほど、あなたは影の魔法を使っていたではありませんか？魔法使いである、あなたの方が詳しいのでは？」

「いいから、話して」

洪々と言った風に彼女は口を開く。やっぱり、さっき言った言葉がまだ耳に残っているんだろう。

「……魔法とは七つの属性　炎、水、風、雷、光、闇、影があり、基本的には一人、一種類しか使えません。伝聖に名を残すほどの高名な魔法使いなら、その限りではありませんが」

よし、《トラスト・オブ・テウルース》と同じ設定だ。

「そして、魔法とは選ばれた者にしか使えませんか」

「え？」

「神が生まれる前より、決めている　と言われています。そして、使える者は大抵、冒険者が貴族になっていますの」

……これは予想外だった。ゲームではプレイヤーは全員使えたからな……先入観があった。

「そして、闇と影の力を持つ者は特に珍しく、わたしは周辺各国にこの力を持っている者がいると、聞いたことがありますわ」

っ！？　その言葉に僕は驚愕した。

もしかしたら……これは結構大変な情報かもしれない……そう思わずにはいられない僕だった。

06・過去の鎖

影の力を持つ者が少ない　と聞いた後、すぐにもつと魔法について聞きたかったんだけど、女将さんに「二人部屋の用意ができた」と言われたので僕とアストリアは部屋を移動する。

僕の荷物と言えは銀貨と銅貨の入った袋くらいだけど、今は影にしまっているため何もないので部屋の移動はすぐに完了した。

部屋の大きさは先ほどよりも大きくなったけれど、部屋の内装は前の部屋と同じ質素で必要最低限のテーブルと椅子とベッドしかない。

今度は部屋に備え付けられていたテーブルに対面する形で座り、話しの続きを始めようとする。

「それで、何が聞きたいんですの？」

「素直になったんだね？」

「あなたに命令されてしまったら逆らえないのですから」

少し脅しの度合が過ぎたかな？　だけど、今は少しでも情報が欲しい。話を進めることにする。

「影について」

「わたしの属性は光ですので、そこまで知っている訳ではありませんが、影の扱いは光と闇以上に難しいとされ、中級魔法以上の力を使える人間は歴史を紐解いてみても三ヶタにはならない　と言われていますわ」

……これは当初の予定通り、モンスターとの戦闘関係はあの赤い髪の女の人に任せることにしよう。

本当なら僕も男だから、強い力を覚えてモンスターを相手に無双

してみたいのは確かだけど……魔法を勉強するくらいなら、元の世界に戻るための情報を少しでも集めたい。

だけど、知識はいくらあっても損をすることはないので、疑問に思ったことを質問してみる。

「中級魔法？」

魔法に種類があることは知らなかった。《トラスト・オブ・テウルース》の説明書には載ってなかったから。もしかしたら初めに受けられる魔法についてのチャートで教えてくれたのかもしれないけれど。

「……自身が影の魔法使いの癖に何も知らないんですわね。魔法には下級魔法、中級魔法、上級魔法、古代語魔法の四つの種類があります。今、言った順番に魔法の力は強力になっていきますわ」

「その下級魔法とかを習うにはどうすれば？」

「下級くらいでしたら、貴族が利用する本屋に行けば魔導書に載っています。中級の魔法が載っている魔導書は大陸に七つ存在する魔法学院の書庫にあります。上級以上になりますと、高名な魔法使いより口伝で伝授してもらうしかありません」

「そうなんだ……」

「もちろんですけど、下級を使えない魔法使いに中級の魔法は使えませんよ」

……順番に強い力を使えるようになる　つまり、ゲームの中の熟練度のようなものがこの世界にもあるということか、ステータス画面がないけれど。

「それで、もしかして魔法を使うのには代償が必要だったりする？」
「ありませんわ。強^しいて言うなら精神が疲弊して何もしたくなくな

るくらいですの」

僕の考察は合っていたようだ。

「じゃあ、次にお願ひしたい事なんだけど」

「何ですか？ どうせ、拒否しても無意味なんですよ？」

「うん。まず一つ目が僕が異世界人であることは黙っていて欲しい」

「そんなことを奴隷が言っても気がふれた、と思われるのがオチですわ」

確かに街の人達感じでは、奴隷と罪人は同じように見られているようだった。

誰が身売りで誰が罪人かなんて判断がつかないから。

そんな奴隷の言うこと何て誰も信じない。

言うなれば、もし同じ大学で詐欺師まがいのことをしている、という噂が囁かれている奴がいたとして突然、そいつが親しくもない僕に「儲け話があるんだけど、一緒にしないか？」などと言ってきたも誰が信じる？ よほどの馬鹿じゃない限り少しは警戒するだろう。

納得がいったので

「とりあえず了承してくれたのなら、それで良いよ。それで、次に」

そういうと、アストリアが喉を鳴らす。

どんなことを言われるか？ で、本当は緊張しているんだろう。

「文字と数字を教えてください」

「はあ？」

「だから、文字と数字をまったく知らないから教えて欲しい」

「あなたは文字も扱えないのに奴隷を買う程のお金を有しているの

ですか？」

「そうだけど」

「……文字については確かに知らない者は多くいるはずですよ。ですが、数字は？ 数字くらいなら田舎の村人の子供でも習いますわよ。孤児だつて孤児院で習いますわ」

「本当に知らない」

この言葉を口にした瞬間、アストリアの瞳は明らかに哀れな人間に向けられるような視線を僕に向けた。

姫様から奴隷に転落した人間にそんな視線を浴びせられるとは……

……何かやるせない……

アストリアに三時間ほど文字を教わった後、一日で詰め込みすぎても良くないと思った僕は女将さんにお金を払いに向かう。

受付にいた女将さんには奴隷を見た時の怒気はなくなっていた。

アストリアを部屋において来て正解だったかもしれない。

「すいません、お金を払いたいんですが」

「ああ、あんたか、さつきは済まないね。お客さん相手に、あんな態度をとつちまつて」

「気にしませんよ。理由は気になりますが」

「……そうだね。迷惑をかけちゃったあんたには話すのは当たり前か」

ちょっと待っておくれ、と言いつ残し奥へ入って行く女将さん。すると、女将さんが入って行った奥から知らない女の子が出てき

た。

「女将が奥でお待ちです」

まるでゲームのイベント発生時みたいな感じがするけれど、ここではそんなことはないだろう　　と思い、僕はおそらく従業員しか入ることのできない受付の奥へ入って行った。

入って行った部屋は石でできた無骨な部屋だった。

客に見えないところまで綺麗に整備する必要があるからだろう。

「そこに座っておくれ」

僕は女将さんに対面するような形で木の椅子に腰かける。アニーさんと同じ金髪碧眼の女将さんに真正面から見つめられる。手はテーブルの上で緑色の筋が見えそうなほど強く握りしめられている。

「結論から言うとアニーは婚約者を奴隷に殺されている」
「っ!？」

結論から言ってくれたのは確かに分かりやすいんだけど、色々疑問が絶えない。

奴隷は奴隷商人が管理しているはずだ。彼等も商売道具をわざわざ逃がすとは考えにくいし、それに買われた奴隷も犯罪になるような行為は命令されても首輪に強制されないはずだ。

「済まないね。結論からは急ぎ過ぎた。奴隷を買った、ということはあるたも奴隷が罪人か身売りだって知っているよね？」

「はい」

「アニーの婚約者を殺したのは前者だね。奴隷になった日に人を傷つけるな　　という命令を受けるはずなんだけど、何かの手違いで

命令されていなかった。騎士の隙について脱走した、そいつは快樂殺人者だったらしくてね……デートをしていた二人の前に突然、現れてアニーの婚約者を……」

「そうだったんですか」

「それも、そんなことが公になれば、奴隷制度自体が揺らぎかねない。元々、奴隷制度を反対している人間も多いんだ」

確かに快樂殺人者を奴隷としても生かしておけば、いつの日か自分達にも被害があるかもしれないんだ。

自己防衛の手段を持たない普通の人からすれば、脅威だ。

「それを避けたかった前領主はアニーの婚約者の家に大量の口止め料を払い、アニーの婚約者を事故死ということにしたのさ。その日から、アニーは落ち込んでね。その婚約者はアニーの幼馴染でもあったからね」

「それで奴隷を？」

「ああ、アニーは奴隷全てを憎んでしまっている。もちろん、奴隷の主人も」

「……………」

「あんたには何の罪もない。ただ商品を買っただけだ。あんたには悪いことしちまった。だから、あの子の宿泊費と食事代はいらないお金を払う　と言われても受け取らないよ。接客を商売にしている宿屋がそんな対応をとつちまったんだ。それくらいは当たり前だ」
「分かりました」

そして、今にも泣きそうな顔になりながら女将さんは

「それと……自分勝手なのは分かっているけれど……お願いだ
良ければアニーのことを少し気にかけてやってくれないか？　幼馴染が殺された日以来、自分と同じ歳くらいの子と話さなかったアニ

ーが久しぶりに話した男の子があんた、なんだ……あんたは、あの子にとって特別なのかもしれぬ、頼むよ」

テーブルに頭が付きそうな程、頭を下げる。

「……………お約束はできませんが、心に留めておきます」

夕食は食堂ではなく部屋でとった。

これはアニーさんのお母さんに頼まれたからだ。

僕としても今、アニーさんとアストリアを会わせることは不味いと判断したので、その申し出を受け入れた。

そして、僕とアストリアは食事が終わるとすぐにベッドにもぐりこんだ。

食べ物を食べた後はすぐに横になっではいけない、太る　と言われていることは知っているけれど、今日も色々と疲れてしまったため今から何かするという気が一切、起きない。

今日は魔法をほとんど使っていないから、単純に疲れただけだろう。

そういえば、夕食の最中からずっとアストリアは僕のことを睨んでいたのは不自然だったけれど。

特に何もしてくることはなかった。

元々、奴隷は主人を傷つけることはできないらしいし、主人から逃げた奴隷の末路は悲惨なものらしいから逃げられる心配はほとんどしていないし　そもそもアストリアの場合はあの元騎士さんを

人質のような形にしまっているため逃げられないんだけど。

睨まれていた理由はもしかしたら僕はアストリアに対して卑怯な人間と認識されているのかな？ まあ、思われても仕方ない脅しのような行為を何回かしているけど……

青い月明かりに包まれながら意識を失いかけた、その時だった。

「なぜ？ 襲わないんですの？」

隣のベッドから意味不明な一言が告げられた。

「はあ!？」

突然だったために僕は素っ頓狂な声を上げてしまった。

「奴隷を買う男の大半の目的は性欲処理のためと聞いていますわ……先輩の奴隷達も奴隷に身を落とした時点で純潔は好きな相手に捧げられない　そう思った方が良いと言っていましたし……」

確かに……言われてみれば、そうだ。

そういう目的で奴隷を買う人もいるだろう。いや、ほとんどがそうなのかもしれない。

正直に言って元の世界に生きて帰るための策を考えることに必死でそういうことを考える余裕はなかった。

しかし、僕だって二十代後半に差しかかるうって歳なんだ。そういう経験がない訳じゃないし、興味がない訳でもない。ただ

「今は良いや」

「はあ!？」

今度は素っ頓狂な声を上げたのはアストリアの方だった。

「何か疲れて過ぎて、それどころじゃない」

これは本音。

知らない街を　知らない文字だらけの街を歩き、なおかつ、その街の影の支配者的な人物と交渉したりして疲れない奴は人間じゃないだろう。

仕事に忙しすぎて、夜の営みができてない　と言ってた友達もいたし僕の気持を分かってくれる人は少なからずいるだろう。

どんな美女が目の前にもいても体力がほぼゼロの状態じゃ、何もできない。

「……わたしが寝ている所で……奪うんですの？」

「そんなことはしないかな？」

「では、特殊な性癖を持っているんですね？」

「何でそうなる！？　というより特殊なのって何！？」

「……奴隷の嗜みということで、夜の仕事の説明も何度か受けました……」

「そ、そうなんだ」

「もちろん、純潔ということも商品価値を上げるために必要でしたので説明だけでしたが……」

何が言いたいんだろう。

「確かに初めはあなたのような数字も読めない貧相な男に純潔を与えるつもりなどありませんでした」

もしかして、これは……

「ですが、わたしとて、美姫として周辺国に名を知られていた者。あなたのような貧相な男に相手にもされなかったとあっては……一生の恥。なぜ、わたしを襲わないのです？ 命令されれば、わたしは泣きながらあなたに純潔を捧げなければいけないのですよ？」

……最悪だ。

三秒程前の自分を殴ってやりたい。

確かに僕みたい男にアストリアが惚れる訳ないか。そもそも惚れるかもしれないタイミングは、まったくなかったし。

「わたしに魅力はないのでしょうか？」

……正直に言おう。

彼女は魅力的だ。ジョゼフさんが貴族に高値で売ろうと考える程に。

人形のように細い体に綺麗な肌。透き通るような瞳、枝毛がまったくない髪。見ていてあきのこない凛々しい顔立ち。

思い返せばゴクリと喉が鳴る。

だけど……だけど、だ。

ここで彼女の純潔を仮に奪ってしまったら、恐らく僕は

「今は知らない。でも、いつかもうから」

にこりと不敵に笑ってから眠りにつく。

はは、これじゃあ、完全に小悪党じゃないか。

まあ、誰かにそう言われたら否定はしないけれど。

この日、この世界に来てから初めて日本にいた時の夢を見た。

07・未知なる存在

「それで、アストリア、アネットに魔導書を買っている店はある？」

女将さんに持って来てもらった朝食を昨夜と同じように質素な部屋でアストリアと二人でとった後、アストリアに昨日と同じように質問してみる。

もちろん余程の理由がない限り本格的にモンスターとの戦闘に参加するつもりはないので必要はないかもしれないけれど、いつでも何が起こるか分からない以上は手数が多いに越したことはない。

「さあ、分かりませんわ」

「どう言う意味？」

「あるかもしれませんが、ないかもしれませんわ。わたしはアネットには売られてからしか来たことがありませんので」

確かにそれなら分からないか……それなら次は

「アネットには何か特産物ある？」

「……確かアップルという果物を作っている　と聞いたことがありますわ。実際に食べたことはないのですがどんなものか分かりませんが」

アップル　リンゴのことなのかな？　露店を見て回った時、カウやピッグの肉という言葉も聞いた。ということは、この世界での牛や豚と言った言葉は俺には英語変換で聞こえると考えても良い。どうして英語に変換されているのかは分からないけれど。

意味は理解できるので問題ない。

僕の考えている通りならこの世界で食べられている食材は日本の

ものとあまり変わらない。食べ物言い方が英語なだけで。

案外すんなりアストリアが話してくれたので、僕は再び魔導書の話題に戻すことにする。

「ちなみに初心者が魔導書を買おうと思ったら、いくらくらいかかる？」

「……わたしは自分で購入したことはありませんので詳しくは分かりませんが、だいたい金貨一枚で初心者用の教本と属性別の魔法の教本を一冊買える　と聞いたことがありますわ」

……金貨一枚か……現在、僕がこの街で使用したお金は約金貨十七枚　日本円で約一千七百万。

その内、使ったのがお金のほとんどはジョゼフさんの所だ。

だから、上手く調整してくれているはずなのですぐにインフレーションが起こることはないだろう。

けれど、このまま僕が計画なく金貨を使い続ければ間違いなくインフレーションが起こる。

そうなれば、知らない所で恨まれることになるかもしれない。

ここからはできる限りの範囲で市場などを混乱させないようにしよう　　と思い頭の中で今後、使う必要なお金を思い返す。

予約している奴隷を買うのに金貨三枚、魔導書を買うのに金貨一枚。

金貨二十一枚ならギリギリ許容範囲かな……

そんなことを考えつつも僕は意識を魔導書を買うことに向ける。

ここでいくら悩んでも結局のところインフレーションが起こるかどうかは商人に聞かない限り今の僕には分からないのだから。

「アストリア、正直な意見を聞かせて欲しい。魔導書買いに行く

際、君を連れて行った方が良い？」

「ええ。あなたのような田舎の村人のような格好をしている者だけなら不当な値段で売りつけられるのがオチですわ」

確かにアストリアは奴隷だけどそのあたりに歩く街人よりも良い布でできているであろう布を使った青くて可愛いワンピースを着ている。

待てよ？

「そういえば、服を先に買いに行こう。それなら、僕が舐められる心配もなくなるし。アストリアも普通の商人がどんな格好をしていたかとかくらいは知っているよね？」

「ええ、少しくらいは……と、いうことはわたしを連れて行くのですか？」

「うん、そのつもり」

「……拒否権は奴隷にはありませんわね」

「そんなことはないよ。何かしたいことはあるの？」

「……………」

無言ということは何もないんだな。

「それじゃあ、行こうか」

アストリアにローブを着てもらい首輪を隠してから僕は歩いていく人に聞いた服屋の場所を目指すのだった。

「アストリア、これはどうかな？」

白い壁がところどころ黒くなっているそこまで綺麗な壁でできていない服屋の中には木でできたテーブルがいくつも置かれており、そこに所せましと服が綺麗にたたまれて並んでいる。壁には黒い汚れ以外にもそれなりにテーブルに並んでいる服よりも上等そうな服をかけているが、その服も若干汚れてしまっている所をみるとそれは売れていないのだろう。

僕はその中から自分の商人のイメージに合う服を一着手にとり体に合わせてアストリアに意見を求める。

自分で言うのもなんだけど僕はそれほどファッションセンスが良いと言えない。

大抵は誰かと一緒に行って誰かに選んでもらっていたし。

「……………」

無視か……部屋で質問したことは命令してでも聞きださないといけないことだったから、命令してでも聞くつもりだったけど服を選ぶのを命令するのは単純に超ダメな奴の気がするしな……

店員さんの意見を聞こうか思ったが今は他のお客さんの相手をしていて呼べない。

さて、どうしてもんか……

本当に困った顔をしているとアストリアはため息をついてから

「これと、これと……後はこれですわ」

それぞれ違ったテーブルから服を何着か、選んできれくれる。

「あ、ありがとう」

一度、無視されたから選んでもらえるとは思っていなかった僕は若干、嬉しかったりする。

「ふん、このまま時間が過ぎるのが勿体なかったただけですわ。それに命令されれば終わりですから」

少し顔を赤くして、そつぽを向くアストリア。
ちよつと照れているのかな？

少し照れている様子のアストリアをその場に残して先ほどまでは接客していた店員さんに「これを買いたいんですけど」と言つて服を渡すと

「お客さん、凄いですね。これ全部つい最近、値段を下げた良質の服ばかりです。どうやって選んだんですか？」

と、驚かれた。

ちなみに値段は乗っているテーブルごとに違つたようでテーブルの上に数字が書かれたプレートが乗せられていた。

未だにきちんと数字さえも扱えていない僕は値段と品物の品質が釣り合っているかどうか何て分かるはずがない。僕が選んでいたのはテキトーだ。

アストリアもてつきり自分の趣味に合う服をテキトーに選んだんだと思つていたんだけど……違つたみたいだ。

「彼女に選んでもらいまして」

僕は僕を睨んでいるアストリアの方に目くばせする。
それを見て店員さんは

「へえ〜彼女さん、良い妻になりますよ。安くて良い物を選ぶことに長けているんでしょう」

にひひと笑い声が聞こえてきそうな程、愉快そうにそう言うてる女の店員。

歳が若そうだから、ただのアルバイトなんだろう。

僕は店員に苦笑で返事をしてからお金を払ってアストリアと共に店を後にした。

それにしても安くて良い物を選ぶ、か。

確かに一般市民の僕はそうした方が良いに決まっている。

だけどアストリアは仮にも一国の王族だったんだろ？ どうしてそんなスキル持っているんだろうか？

そういえば、僕の後ろを黙々と歩く少女のことについて僕は何も知らないことを改めて思いだしたのだった。

一端、宿に戻り服を村人Aのような服から儲かっている商人風の服にチェンジすると僕は魔導書を置いてあるという書店へと向かう。どうやら、この世界では紙というのはそれなりに高価だけどビツクリするくらい高い値段ではないらしい。

庶民でも普通に生活していれば月に2、3冊なら買えるそうだ。ただし、魔導書については頭一つ抜ける値段らしいけど。

高価な物を扱っていると言う事でジョゼフさんがいた屋敷のよう

な店を想像していたのだけど魔導書を置いてあった店は思いのほかボロかった。

これならアニーさんの両親が営む宿の方が遥かに豪華だ。やはり、本という娯楽よりも食という娯楽の方がこの世界の人々には人気があるんだろう。

「失礼します」

そう言いながらノックはせず店のこれまた「ぎい」と音が鳴りそうなオンボロとまではいれないがボロい扉を開けて中に入る。

店の中は僕の想像とは別世界だった。

いや、想像どころか先ほどの服屋とも別世界だ。

紫色のカーペットが床に敷き詰められているし。壁には何かの動物の骨が飾られている。窓などにも床と同じ色のカーテンで外の光を遮断している。

そんな部屋の中の灯りは七つある蝋燭の火でまかなわれていた。本屋というより、むしろ占い屋　と言った方が分かりやすい内装だ。

そもそも本が並んだ棚などないし。

極めつけに受付に座っているのは黒いローブで顔を隠した占い師のような人。水晶を受付の上においてあるところをみるとこの店の本業は占いなのかもしれない。

「来たね……」

そのかすれた声から察するにおそらく老婆だろう。間違っていたら申し訳ないけれど。

「待ってたよ」

老婆のその言葉に疑問を持ってしまう。

「僕が来ることを知っていたんですか？」

「ええ。知っていたさ。知らなくても知っていたさ」

やばい、久しぶりに苦手なタイプの人だ。

僕は言葉のキャッチボールがきちんとできない人は苦手なんだ。
助けを求めるべく後ろにいるはずのアストリアを見てみると驚愕に染まった顔をしていた。

「そこのお嬢ちゃん」

「は、はい」

「君のご主人様に、あたしやのことを教えないでくれ。教えたら店から二人共出て行ってもらうよ」

老婆の言葉を聞いて僕はアストリアの方を再度見る。
ローブに隠れていて首輪は見えない。

「さて、異世界の少年よ。君はあたしやに何を求める？」

「っ！？」

この老婆は僕が異世界人であることを知っているのか！？

いや、待て。

落ち着け、ここで冷静さを失ってはいけない。

冷静さを失えば、どんな者でも簡単に騙されたりする。

僕は深い深呼吸をした後、ゆっくりと唇を動かす。

「あなたは僕に何を与えてくれるのですか？」

「ほう。そう返して来た者は初めてだよ。さすがは神に選ばれるだけはある」

「質問に答えてください。あなたは僕に元の世界へ帰る方法を受けてくれるのですか？」

「残念ながら、あたしは神と関係ない。古い魔法使いさ。与えられるのは魔法の力を持った書くらいだね」

「そうですか」

こんなに簡単に手掛かりが見つけるとは思っていなかったから、落胆などないかな？　と置いていたけれど思いのほか気分は沈んでしまった。

「さて、本題だけど。あなたは何を望む？」

「与えられるのは魔法の力を持った書くらい　と言ったのはあなたですよ」

「そうだね。それなら、これをあげよう」

差し出されるのは二冊の本。

一冊の表紙には　　しよしんしゃ　　初心者とこの世界の文字で書かれている。

おそらく、初心者用の本なんだろう。

もう一冊の表紙に書かれた文字は……読めない。

アストリアに読んでもらおう　　と思つた時、老婆は

「あんたには、これしか売れないよ」

と、言われてしまった。

ここで普段なら僕は何とかして他の物も売ってもらおうと交渉するのだけど僕の勘がこの老婆に何を言っても返事は変わらないと告げてくる。

嫌なことにこういう時の僕の直勘は結構な確率で当たる。

……仕方ない。

「いくらですか？」

とりあえず二冊だけでも買おうとそう言ったら

「金なんていらないさ。ただし、この本は守り通してよ。後ろの嬢ちゃんは、まだあたしゃの本をあげられないね。また、来な」

そう老婆が言った瞬間、老婆の手から僕の手にも二冊の本が移動して来た。しつかり僕は本を二冊持っている。無意識の間に……慌ててどういふことか聞こうと思ったら、いきなり僕とアストリアは何かの力に吹き飛ばされるようにして外へ弾きだされた。

まったく、その力に抗えなかった。

踏ん張る暇さえ許されない。

店外に吹き飛ばされるとすぐに店の扉は閉じてしまう。

何とか状況を確認しようとアストリアの方を見ると彼女は地面にへたり込んでいる。

それに彼女の瞳は未だに驚愕に支配されている。

おそらく自分が何をされたか彼女も分かっていない。

それなら

「アストリア、あれは誰だったの？」

そう聞く。もう店外なんだ聞いても問題ないはず。

「……魔法をこの世に広めたとされる最強の魔法使いにして魔導士の一人　ウィザード様ですわ……彼女は死後、霊になって自分の書いた本を託すための相手を探している　と聞いてことがあります……まさか本当だなんて……」

その言葉を聞いて僕は慌ててもう一度、店の扉を開くとそこは本が入った小汚い棚がいくつか並んでいる本屋だった。受付に居るのも中年のおっさんが一人。明らかに先ほどの店とは違う。

おそらく望んで会える人ではないのだろう。ウィザードと話したい衝動を必死に抑えながらもアストリアを立てて昼食を食べるべく宿へと足を向ける。もう、この場にいても何にもできないんだから。

だけど、彼女は僕が異世界人だと認識していたし、七属性以外の魔法を使っているようだった。

そういう人もいるんだ。

だから……きっと、元の世界に戻るための方法がある。そう少し希望を持ちながら。

07 未知なる存在（後書き）

08・初心者用魔導書

ウィザード　魔法を広めたとされている魔法使い。彼女からもらった魔導書なら僕も簡単に強い魔法を使ってモンスターを相手に無双ができるかも……という夢は宿に帰ってすぐに砕けちった。なぜなら

「本が開かない……」

僕に読めない文字で書かれていた方の本はなぜか開かない。開かなければ中の文字など読めるはずがない。つまり、本の中に書いているであろう魔法を一切、知ることはできない……

それならウィザードが書いた初心者用の本なら普通の初心者用の本より凄いことが載っているかも！？　と思いきやアストリアに確認してもらったところ彼女が見ていた初心者用の本と同じ内容らしい。というよりも、そもそも初心者用の本を書いたのはウィザードらしく別にこれは不思議でも何でもないことらしい。

期待していた分、落胆も大きい。なぜかウィザードが、くつくつく、と僕のことを笑っている様子が容易に想像できた。

仕方名がないので開かない方の魔導書は影の中にしまつて初心者用の本を読むことにする。

そして気づいた。

……字が難しすぎてまったく読めない。

確かに昨日、ちよつとはアストリアから習ったから読めるけど、まだ文字を覚えている段階であつて単語を覚えることをすっ飛ばして文章を読めるはずがなかった。

アストリアに助けを求めようとして彼女の方を見てみると彼女は

自分が使っているベッドにちょこんと座っている。

ただ特に何もせず窓の外に広がる空を見つめているたったそれだけの行為のほずなのに……その光景はまるで美術館に飾られている絵画のように美しい。

そんな光景についつい見いつてしまう。

僕のそんなあからさまな視線に気づいたのか彼女は眉間にしわを寄せてこちらに視線を送ってくる。

「……………」

無言。

それが、彼女が僕にとる最後の抵抗なのかもしれない。

「アストリア」

「今更ですがあなたに名前を呼ばれる筋合いは……ありますわね。あなたはわたしのご主人様でしたわね」

何も感情を写さない瞳でそう言われると何も言えなくなる。

もしかしたら僕の中にはまだ人身売買をした　という罪悪感があるのかもしれない。

そんなものがあっても生き残り、元の世界に帰るためには何の役にも立たないのに。もちろん、元の世界に帰った後は必要になるけれど……

僕は彼女に向かって声を絞り出す。

「この魔導書を声に出して読んでくれないかい？」

「……分かりましたわ」

そう言っ僕の方へ近寄って来る。

昨日は対面する形で座っていた僕達だけど今回は椅子を移動させて二人で本を読みやすいようにする。

そういえば中学生の頃、教科書を忘れてしまった時に隣の席の女の子が教科書を見せてくれたことがあったのを思い出す。

その時に教科書を見せてくれた女の子の髪はもちろん黒だったけれど、どこかアストリアに似ている。

綺麗だったとかではなく、何であんたに見せなきゃいけないのよっ！ 文句を言いながらも見せてくれた優しい子。

確か、友達がそういう子のことをツンデレと呼んでいたような気がする。

僕の前でデレてくれたことは一度もなかったけれど。

アストリアの感じはその子に似ているかな？ 命令されるのが嫌なだけのような気もするけど。

そんな昔を思い出している僕の横でアストリアは本を開けて読み始めてくれる。

「魔法とは神の力を借りて行う秘儀のことである。世界に充満する魔力と己の中に存在する魔力を合わせることで神の力を借りることができる」

アストリアの透き通るような声。

一瞬、その声に聞き入ってしまったけど、せっかくアストリアが僕にも見えるように本を開いて読んでくれているのだから文字を覚えられるように努力しよう。

僕はアストリアと肩がぶつかりそうな程、近づいて本を覗き込む。

「ここはわたしが昨日、説明した部分ですので飛ばしますわね。属性ごとの魔法についての説明をしようと思いますが、どの属性を読めば？ あなたは影の属性のようですので、影を読めばいいのです

か？」

「うん、お願い」

「……分かりましたわ」

目次を開けて影の属性の魔法について書かれたページまでページをめくっていくアストリア。

ちなみに初級の本には全ての属性の魔法について少しずつ書かれているそうだ。

「影の魔法　それは最も難易度の高い魔法である。なぜなら影の魔法の力を貸す神が気まぐれだから」

「はあ？」

僕の声を見捨ててアストリアは言葉を続ける。

「気まぐれな故に、大きな力を使える選ばれた者は少ない」

もしかして僕達の世界の神と違ってこの世界の神は信仰の対象じゃないのかな？　まあ、結局のところ異世界の宗教に興味がないので聞かないけれど。

「しかし、選ばれた者はその力を行使して変革をもたらすであろう」

そこで一端、アストリアの言葉はとまる。

「こんなところを読んでいても意味がありませんが続けますか？」

「アストリアが必要だと思ってところをお願い」

「……奴隷を信用なさるのですか？」

「奴隷は信用しない。アストリアを信用しているから」

「……わたしと会ったのは一昨日ではなかったのですか？　一昨日

出会った者を理由もなく信用する何て愚か者のすることですわ」

「うっ、ん、理由はあるよ。僕の勘。今まで結構色々な人を見て来たけど、僕の勘って高確率で当たるんだよ」

まあ、時々はずれて痛い目を見ることもあるけれど。

「……分かりましたわ」

それからアストリアは黙読を始めた。

どこを話せばいいか見てくれているのだろう。

僕は本を読むアストリアを見ているのが、なぜか気恥しかったため彼女が先ほどまで見ていた窓の外を見ることにした。

そこは日本で見た空と同じ青い空が広がり白い雲がぷかぷかとのん気そうに浮かんでいる。

「読みますわよ」

どれくらい空を眺めていたかは分からないけれどアストリアのその言葉で再び本に視点を落とす。

「影の魔法の中で最も難易度の低い魔法は影の門。シャドー・ゲート自身の影の中に色々な物を収納できる魔法である。これは影の魔法を扱える者の魔法の基礎であり、それと同時に影の魔法の才能を現す測りでもある。古代語魔法を扱える者は竜を何頭、入れようと空間が尽きることはない」

つまり、自分の影に収納できる量でその人の才能が分かるのか……確かめるのが何か怖いな……

というより何か竜とかいう物騒な単語が出てきたような気もするけれど聞かなかったことにしたい。

「次に、影の魔法で基礎となる魔法は影シャドー・メーカーの製作である。己の影の大きさよりも小さな武器を影で作りだすことができる。作りだせる者を明確にイメージして作りだす必要がある。それ故に、これができないればどれだけ才能があろうとも影の魔法を使うことはできない」

もしかして、僕が影シャドー・ソードシャドー・ランスシャドー・シールドシャドー・メーカーの剣、影の槍、影の楯の三つだと思っていた魔法は全て影の製作の一種で……実際には僕は一つの魔法しか使えてなかったのか？

うわっ、メツチャ恥ずかしい。

三つも使えたって喜んでたのに……

「とりあえず、それだけですわ」

「え？」

「影の魔法について載っているのはこの二つの魔法だけですの」

「いや……もうちょっと強そうな魔法は？」

「ありませんわ」

確かに初級の本には全ての魔法の基礎が載っている訳だから、一つ、一つが少なくても分かるけれど……二つは酷いよね？

あんまり目新しい知識はなかったし……

「影の魔法を使う人は少ないので、ページが減らされたのかもしれない」

また影を選んでしまった代償か……

まあ、何度悔やんでも属性を変えられる訳じゃないからな……

「それなら魔法を上手く使おうと思ったら、どうしたらいいの？」

そう、魔法がないのなら仕方ない。

とことん基礎を極めてやる。確かアストリアも何の属性かは忘れられど魔法が使えるようなことは言っていたはずだから鍛え方も知っているはずだ。

そもそも、魔法が使えなければ魔導書の存在も知らなかったはずだし。

「……人それぞれですがわたしは座って自分の魔力の流れを掴みましたわ。それから、その魔力を操るイメージをした後に実際に魔法を使つての訓練でしたわ」

「自分の魔力の流れ？」

「わたし達は自分の中に多かれ少なかれ魔力を持ち無意識の内に体外に放出しています。それを自分で把握するのです。それができなければ本当の意味での魔法は使えません」

……僕はそんなことをしなくても魔法を使えましたけど とは
言いづらかったから素直に

「どうすれば、魔力の流れを感じられるの？」

そう聞くことにした。

「……人それぞれですので一概には言えませんが体の周りに意識を集中すれば、いつかは使えるようになりますわ」
「そっか」

そう言われて、ふと思いついたのが座禅だった。

なぜ、座禅かと言うと昔、漫画の中で主人公が仙人の下で座禅を組んで修行をしているシーンがあったからかもしれない。

ちなみに床に座るのはお尻が痛いのでベッドの上で座禅を組む。

そんな僕をアストリアは不思議そうな目で見た後、またベッドに戻り空を見上げていた。

そっだ。すっかり忘れるところだった。

「アストリア、ありがとう」

僕のその言葉を聞いて目を開けて驚いた様子のアストリアだったけれど無視された。

その後、座禅を組み魔力を感じるべく、目を閉じ集中するのだった。

09 ギルドカード

一日で魔力の流れを感じられるようになる　そんなことはできなかった。

普通の一般人だった僕にそんなことができる、と思う方がおかしい話だったのかもしれない。

次の日、昨日と同じように起き上がると昨日はアストリアの方が先に起きていたのに今日は違った。

未だにベッドの上で、すやすやと気持ち良さそうに寝ている。

僕は今の間に昨日、行った魔力の流れを掴む修行を行うことにした。

座禅をベッドの上で組んで目を閉じる。

考えてみれば魔力とは何なのだろう？　身体の周りに纏われているという気というものと同じものなのだろうか？

この世界に着て確かに魔法というものが使えるようになった。だけど、それはどうやって使っていたのだろうか？　感覚で使っていたのは確かだけど。

魔法を初めて湖の前で使った時、僕は

そう考えた時、ふと視線を感じた。

目を開いてみると、アストリアがこちらを見つめていた。空を見つめていた時の何を感じているか分からないような感じではなく、確かに僕に興味を持っているようだ。

「何？」

僕にそう言われると思っていなかったのか、ベッドの上でシーツを握りしめながら顔を横に向けて驚きを隠そうとしていた。

特に魔力の流れを感じられそうになっていた訳でもないのに修行を一旦中断してアストリアの返事を待つ。
すると、

「わたしの言ったことを信じているんですの？」

そう逆に聞き返されてしまった。

そう言った時のアストリアの眉は心なしか不機嫌そうにひそめられている。

彼女が今、着ているのは僕が商人みたいな服を買った時、一緒に購入したバスローブのようなパジャマだ。

「うん」

「もう一度、聞きます。わたしが昨日言ったことをまだ、信じていますの？」

「うん」

なぜか、二度聞かれてしまった。

おそらくは座禅を組んでいるのを見て魔力の流れを感じようとしていることに関してのことを言っている、と思うんだけど違ったのかな？

「……そうですか……それで、できましたの？」

「ん？ 全然まったくできないよ」

「それなら、なぜ奴隷の言うことを間に受けますの？　わたしが嘘を言っているとは思いませんか？」

「アストリアが嘘を言うような子に見えないから」

彼女は眉をさらに細めてから、僕から目線を外し窓の外の景色を見始める。

アストリアの質問の意味は良く分からないけれど、もう、これ以上何か話してくれる雰囲気ではなかったので、とりあえず僕は再び目を閉じて魔力の流れを掴むべく修行を始めるのだった。

また今日も女将さんが朝食を部屋まで運んでくれた。

僕達を食堂に近づけたくない理由はアニーさんだ。

アニーさんにアストリアが抱きついた、あの日から僕はアニーさんに一度も会っていない。

普段の彼女の仕事が裏方なもの、もちろん理由の一つだろうけれど宿の人、全員が僕とアニーさんを近づけさせないようにしているふしがある。

女将さんも、おそらく僕にああ言ったけれど僕が直接アニーさんに何かしてくれるとは思っていないのだろう。だから、周りと同じように僕をアニーさんに近づけさせないようにしている。

二律背反しているようにも思えるけれど、奴隷という縛りに娘が縛られたくない、と思う反面やはり、辛い記憶を思い出して欲しくない親心もある。それが女将さんをそうさせているのだろう。

それにしてもアストリアは食事中、話をしない。

アメリカにいた時も、英語が喋れるようになると僕は友人と良く

喋りながら食事をとっていた。

行儀が悪い　と言われればそれまでんだけど、食事をしながら何かを喋るのは楽しい。

まあ……アストリアは僕が何か聞かない限り、喋ってくれないんだけど……

「ねえ、アストリア」

「……………」

黙々とフォークを動かすアストリア。

「アストリアって、誰か好きな人いたの？」

「はあっ！？」

僕の言葉にアストリアは反応してくれた。

「それで、どうなの？」

「……………それは、わたしに答えろ？　という命令ですよ？」

「違うよ。ただの質問」

「それなら、わたしに答える義務はないわ」

そう言いつつも、どこか顔の赤いアストリア。落ち着いている雰囲気だけど、やっぱりアストリアも年頃の女の子みたいだ。

あれ？　そういえば。

「アストリアって何歳？」

「……………答える義務は？」

「もちろんないよ」

「それなら」

「答えてくれないの？」

「……質問するなら、まずは自分から言っのが筋ではないのですか？」

「あ、そっか。僕は27歳」

「はあっ!？」

アストリアがテーブルを叩いて立ち上がる。

「あなたはどう見ても、わたしと同じくらいの歳でしょう!？」

「え？ 本当だよ」

確かにこっちに着た時から若返ったような気もするけれど、僕の精神年齢は一応は27歳なはずだ。

「いくら、奴隷と喋っているからって嘘ばかり！ あなたは奴隷を

人とも思っていないのですの!？」

「嘘は言っていないんだけど……」

「あなたはどうか考えても、わたしと同じ18歳くらいにしか見えませんの!」

「アストリアって18歳なんだ」

「っ!？」

もしかしてアストリアって、うっかりさんだったりするのかな？
しっかり者のイメージが良く似合うけれど。

「……本当に、27歳ですの?」

「うん」

僕があっさり、答えるのを聞いてアストリアはゆっくりと席に座る。

「わたしはあなたのことが嫌いです」

その宣言に僕は若干、傷つく。

誰だって綺麗な女の子に嫌いですが、と宣言されたら傷つくだろう。

「奴隷と同じ物を食べ、奴隷を馬鹿にしない。奴隷の言ったことを素直に信じる。あなたがわたしを馬鹿にしている。そう思ったのは全てわたしの思い込み。被害妄想、異世界人というのも本当のこと。おそらく歳のことも本当なのでしょう……」

まるで、何かを訴えるような言葉。

「わたしの屋敷にいた奴隷達をわたしは、皆、人間ではない家畜のように扱いました、それなのになぜ、あなたはわたしを、わたしが奴隷にしたような態度とはまったく違う態度をとったのです？」

「……………」

「わたしはわたしを買った人を憎もうと決めていましたわ。その方が楽だから……。しかし、あなたのことをわたしは上手く憎めない。卑怯ですわ……」

それからアストリアは無言で食事を続けた。

もちろん、僕も。

祖国が滅亡し、自分は自分を守っていた騎士のために、奴隷の身分に身を落とす。

どれくらいの覚悟が必要だったのだろうか？

いつもの凜とした態度で分らないけれど、アストリアは普通の女の子と変わらないんじゃないだろうか？

奴隷になったせいで、どれだけ酷い目に合うことを予想していたのだろうか？

僕はヘタレだから他人のために自分が奴隷になる事なんてできな

い。

しかし、彼女は18歳でその決断をしたんだもんな……

暗い表情のアストリアを部屋に残し僕は宿から離れる。

本当なら、アストリアも連れて行くつもりだったんだけど、あのどこか不安定な状態で外に連れ出すのは得策ではないと思って僕は思い切って彼女を置いて来た。

文字も読めない僕が一人でどこに向かっているかと言うと、ギルドである。

身分を証明するカードのことを門番はギルドカードと呼んでいた。アー二さんと初めて食事をした時、この街のギルドの場所は聞いている。

ちなみに調べた話しではギルドとは正式名称、冒険者ギルドらしい。

ギルドとは組合の英語なので日本語だけで言えば冒険者の組合。おそらく、ゲームなどと同様に用心棒を雇ったり、色々な種類の依頼をしたりする場所だろう。

冒険者達が旅をするための必要な生活費を稼ぐための場所でもある。

ちなみに《トラスト・オブ・テウルース》の通貨であるエルはモンスターを倒してお金を得るところからエルとつけられたそうだ。

今回、僕がギルドへ向かっている理由は別に依頼をしたり、受けたりするために向かっている訳ではない。

僕のギルドカードについて調べるためだ。

昨夜、アストリアに僕のギルドカードを見せたところ彼女の騎士が持っていた物と何ら変わらないらしい。

しかし、ギルドカードは身分証明書になる代物だ。

作った覚えのない僕のカードが本当にギルドで使えるか、どうかの確認を試みたかったんだ。

偽造でも、おそらくジョゼフさんに頼めばもみ消してもらえはすだから、ある程度は安心だ。

僕はアニーさんの両親が経営する宿よりも少し小さなレンガで作られた店に入る。ここがギルドらしい。

モンスターを倒してお金を稼いでいるような人たちのたまり場、イメージで言えば鎧を着た屈強な男達がたむろしている風に思う。

しかし、いざ中に入ってみると荒くれ者達が　いなかった、というより時間が悪かったのか、受付のお姉さん以外には誰もいない。少し不審に思いつつも僕は《トラスト・オブ・テウルース》で初めに魔法設定をした時のような受付の方へと近寄って行く。

すると

「いらつしやいませ。この度は、どのようなご用件でしょうか？」

綺麗でもブサイクでもないお姉さんが僕に話しかけてくれた。

「実は……」

少し言い淀む。

案の定、ギルドの受付のお姉さんは少し不審に思ったようだ。

「僕は先日、記憶を失ってしまいました……」

「え？」

僕の言葉を聞いて、少し困惑した様子のお姉さん。

もちろん、記憶喪失なんて百パーセント嘘だけれど。これは有効なはずだ。

「ギルドカードを持つていたのでおそらく記憶を失う前はギルドに所属していた、と思い。少しでも手掛かりが欲しくて今日こちらに寄らせていただいたのです」

「……そうなんですか。分かりましたギルドカードをお貸しください」

お姉さんの言葉に僕はギルドカードを素直に渡す。

あの《トラスト・オブ・テウルース》で魔法設定をした時にお姉さんが操作していた機械？ と同じものを操作するギルドのお姉さん。

それが何なのか聞いてみたかったけれど今は我慢する。

「あれ？」

お姉さんは首を傾げる。

やっぱり偽装か何かなのかな……

「申し訳ありません。こちらの手違いか何かでギルドカード内のデータが全て消えてしまっております。きちんと記入していた痕跡はあるのですが……」

「そうですか……」

明らかに落ち込んだ様子を装う僕。

「あの……それで何ですがこの街で登録したことにして再発行いたしましょうか？ 本来なら銀貨一枚、手数料にいただいているのですが今回はこちらの手違いですので」

「いいんですか？」

「はい」

ラッキーだ。これで正式にこの世界での身分証明書が手に入った。もちろん、僕は弱いのでギルドで依頼を受けることなどないと思うけれど。

それから出身地など、いくつか質問されたが全て極東の島から来たようだ。などと嘘をついた。

初めに記憶喪失だ。と言っていたのに、そんなことだけ覚えているのは不審に思われるかな？　とも思っただけだけど一般的な知識は覚えているけれど自分の名前などと言った情報のみ忘れた記憶喪失者を受付の人が見た事があるそうで追求されなかった。それどころか、

「大変だと思いますが頑張ってくださいね」

と、励ましの言葉までもらってしまった。

それと受付のお姉さん曰くやはり、荒くれ者のような人達は僕が来た時間は大抵モンスターの討伐依頼やその他の雑用のため出かけているそうでギルドにはいないそうだ。

いる時間帯は朝一番で依頼を受けた時か、夕方の依頼の達成報告の時だそうだ。

僕には関係ない情報だったけれど。

これで生きていけるための条件は、ほとんど整ったことになる。後は……

10・本人の言葉

ギルドで簡単な説明を受けた後、僕は宿へとまた戻るべくゆつくりと歩いていく。

この世界に来て初めての帰る場所　それがあの宿だから、まるで自分の家のように錯覚してしまう。
おかしな話だけど。

そんなことを考えていると、ふと、この世界に来てからまだ五日しか経っていないことを思い出してしまった。色々なことがあったから、もっと時間が経ったように思えて仕方ない。
後、いったい何日ここにいなければならないのだろうか？

暗い　自分で考えていてそう思わずにはいられない。

だって帰れる可能性はまだ0になった訳じゃないんだから。

そうだ、宿に帰る前に何か景気づけに買って帰ろう　そう思った僕は宿へと進める足を止めて、大通りの露店を目指す。

時間は昼前だから、食べ物がいいかな？　宿では昼食は出してくれないから自分で買って帰らないといけない。もちろん、お金を払えば朝食と同じ物を出してはくれるけど。

一日目から合わせて、だいたい今までの昼食費に13エル使ったはずだ。四日で2エルちょっと。

僕はまず肉を焼いている露店に向かおうと思った時、ドンツと誰かとぶつかってしまう。

「す、すいません」

相手の言葉の一瞬、後に僕も

「申し訳ありません。考え事をしていたもので」

慌てて謝る。

しかし、僕も相手もお互いの顔を見た瞬間に、固まってしまっただけなら、僕とぶつかったのは

アニーさんだったから。

お互いの顔を見て呆然としていると、今度は違う人とぶつかりそうになり僕とアニーさんはお互いに我に返る。

あの日、以来初めて会った。

向こうも少し、気まずそうな感じだった。

このまま別れてしまってもいいのだけど　このまま別れてしまふことが得策ではない、と思う自分が僕の中にたしかにいた。だから

「少し、お時間をいただけますか？」

僕は彼女を誘うことにした。

僕とアニーさんが入ったのは喫茶店のような店だった　というより本当に喫茶店だったのかもしれない。四人掛けのテーブルに僕たちは対面する形で座る。

お店に入った以上、何も注文しないで水を飲むだけでは相手に失

礼になるかもしれないので何か注文しよう、と思った時、気づいた僕は文字が読めない。

よって各席に置かれているメニューが書かれているであろう紙の文字も読めない。

僕は引きつった顔を何とか元に戻すと、先にアニーさんに注文を言ってもらい「彼女と同じモノを」で何とかその場をのりきった。

そういえば、水をまず始めに出す文化は同じなのか……と、そんなことを考えている場合じゃなかった。

今は一人でいる訳じゃないんだから。

アニーさんの方を見ると、彼女は何かを怖れるように

「……………なぜ、あのような失礼なことをした、あたしをお茶に誘ってくれたんですか？」

と僕に聞いてきた。

「正直に言えば、分からない」

「え？」

「ただ、話しがしたい、と思ったから誘った、それだけ」

僕の言葉を聞いてアニーさんは

「本当に似ているんですね……彼に」

そう返してきた。

僕は素直な気持ちを伝えただけなのに変な切り返しをされてしまった。

さすがに僕でもその彼というのがアニーさんの元婚約者くらいのこととは分かるけれど、どう答えていいか見当もつかない。

必死にどう返事をするべきか、考えていると彼女が頭を下げてきた。

それと同時に

「ごめんなさい」

そう謝られてしまった。

「え？ あ、あの……」

「あの時、睨んでしまつて」

「……あの時はアストリアが突然、アニーさんに抱きついたことが原因ですので、むしろこちらが……」

「いえ、違つんです。あたしがあなたを睨んだ理由は……」

おそらく、女将さんが言っていた奴隷が元婚約者の仇だから、その主である僕も、同じ仇に見えたからなんだろう。

既に女将さんから、聞いているから知っているんだけど、ここで僕が知っているから話さなくていいよ、というのは何か違つ気がした。

僕はアニーさんの言葉で、この話を聞かないといけない。
そんな気がした。

「……聞いていただけますか？」

「はい」

間を一切開けず、そう答える。

するとアニーさんは一度、深呼吸をしてからゆっくりと口を開く。

「あたしには婚約を誓った幼馴染がいました。彼は、どこか抜けていて頼りなさそうだったのですが時々、あたしをドキッとさせるよ

うなことをしてくれる、そんな人だったんです」

彼女は、どこか遠いところを見るかのようにしながら話してくれる。

「だけど、彼はわたしを庇って死にました。犯人は脱走した奴隷でした。なぜ、罪を犯した奴隷は今も悠々と生きているのに、優しい彼は死ななければいけなかったのでしょうか？ あたしは毎日、そんなことばかり考えていました。仕事もせずに」

当然の疑問。

僕が彼女だったとしても、そう思っていただろう。
アニーさんの瞳に少し涙がたまる。

「だけど、ある日、彼がもし今の自分を見たら、どう思うだろう？ と考えた時、このままじゃいけない。もう一度、頑張ろう と思っただんです。それが半年程前になります」

「強いんですね」

「いえ、あたしは強くありません。現に奴隷を見た瞬間、憎しみがあたしの中で暴れ回ります」

そこで、紅茶のような飲み物が運ばれて来た。

それにアニーさんは口をつけてから、続きを話してくれる。

「だけど、本当はあたしも分かっているんです。奴隷になった人達が全員が罪人じゃないってことくらい。もし、あたしが孤児だったら、おそらく奴隷になっていたでしょう。だから、彼らが全て悪い人じゃない。彼を奴隷全てが殺した人じゃない と分かっているんですが……」

流れる一筋の涙。

「そう思っていたはずなのに、カケルさんと彼女を見た瞬間、何が何だか分からなくなりました。そんな時に抱きつかれて……すぐに彼女に謝ることは申し訳ないのですが、できません。だけど、いつか……いつか、謝りますので彼女にそう伝えてもらえないでしょうか？ 自分勝手に最低なのは十分、理解しているつもりです。ただ、今、彼女に会っても……」

「分かりました。そう伝えておきます」

「良いんですか？」

「アストリアだって、理由を聞けば理解してくれます。アストリアはきつと優しい子ですから」

「信頼されているんですね」

「ええ、彼女はしてくれていませんが」

苦笑する僕に、やっと彼女は笑顔を見せてくれるのだった。

宿の自分の部屋に戻るとアストリアは、また窓の外を見ていた。

「ただいま」

僕がそう言っても、こちらさえ見てもらえない。

何とかこちらを向いてもらって僕が昼食に、と思って買って来たパンと串に刺さった肉を渡すとアストリアは少し驚いた顔をした。

「これは……」

「昼食」

そう答えると彼女は目をきらきらさせて串にささった肉を見た。

「珍しいの？」

僕の言葉にピクッと動いてから

「め、珍しくないですわ」

そう否定した。

考えてみればアストリアは元お姫様だ。こんな露店で買った物なんて、食べたことはないだろう。珍しくて当たり前か。

「まだ、あるんだけどいる？」

一瞬、目を輝かせたが、すぐに「いらない」というアストリア。そんな彼女はまるで子供のように可愛く思ってしまった僕はつい「あ、そう」と言ってチーズの入ったパンをすぐ食べ終わると、アストリアの前で二本目の串に刺さった肉を食べる。

もちろん、アストリアに渡した一本は既に彼女の腹中である。

彼女は好きな物を一番最初に食べる人なんだろう。

僕が肉を食べている様子をちびちび、とパンをかじりながら観察している。

買ってきたパンは二つ、串にささった肉は十本。それで3エルだった。

正直に言えばパンも肉もそれなりの大きさなので日本やアメリカにいた僕からすれば三百円で、こんなに食べられるなんて感無量だ。僕は残った七本の肉の内の一つに手を伸ばす。

それをモノ欲しそうに見るアストリア。

不謹慎だけれど、姫様のこんな顔を見たのは僕か彼女の両親だけだろう。

「ねえ、アストリア」

「……………」

相変わらずの無視。

「お肉欲しい？」

その言葉を聞いた時、ピクンと頬が動く。

「いらないですわ」

すぐに返事をするアストリア。だけれど、彼女の落ち込み具合は半端ない。

これ以上、虐めるのも可愛そうなので。

「四本あげるよ」

と、言う。

すると

「本当ですよ!？」

満面の笑みでそう聞き返して来る。

元々、半分はアストリアのために買ったものだし。別にいいのだけれど……一瞬、ここで「嘘だよ」と言いたくなる。

そんな意地悪を必死に胸の間にしまつてアストリアに串を渡す。
彼女はきらきらした瞳で「お肉ですの」と呟いている。

本当にアストリアはお姫様なのかな？ という疑問が沸いてくる
が可愛いのでスル しておこう。

「それで、アストリア」

アストリアが嬉しそうに肉にかぶりつこうとした時、僕は話しかけた。

すると、彼女はとつさに身構える。

「っ！？ 今更、お肉を返せ、とでも言うおつもり！？」

その様子は今まで見たことがないくらい焦っている。

本当にお肉が好きなんだな……あきれるくらい。

とりあえず

「違うよ。食べながらでいいから聞いて欲しい」

誤解を解いてから、僕はアニーさんについて話す。

彼女が最後のお肉を食べ終わる時にちょうど僕が話すアニーさんの話も終わる。

「謝罪の件に関しては、むしろ、こちらの方がしなければなりませんので構いませんわ。突然、知らない人に抱きつかれれば、あの反応は当然です。しかし……その幼馴染さんは、きっと殺されたのですわね」

「どういう意味？」

僕はきちんと、奴隷に殺された と言ったはずだ。

それにしても今日のアストリアはなぜか聞いてないことまで教えてくれた。

饒舌になっっている？

「誰かが手引きしなければ、そんな事件は起こりませんわ。絶対に。おそらく、その人に敵意のある誰かが意図的にその人を殺したというのが妥当でしょう」

「今日は饒舌なんだね」

「ふ、ふん、お肉をくださったからではありませんわよっ！」

そっぽを向いてしまうアストリアに視線を向けたまま、今、彼女が教えてくれたことについて考える。

誰かが意図的に殺した……それは、もしかしたら僕が関わってはいけない案件なのかもしれない。

だけど、知ってしまった いや、可能性を知ってしまった時点で少し調べたい と思ってしまった。

もしかして僕はお人好しなのかな、自分の世界に戻る方法もまだ見つかっていないのに。

それはそうと、今日は思わぬ収穫があった アストリアと話す方法だ。

彼女はお肉をあげれば、大抵のことは脅さずに話してくれそうだ。本人に言ったら間違いなく否定するだろうけど。

そんな、元の世界に帰ることとは、まったく関係のないことを考えながら僕は、再び、アストリアと会話を続けるべく彼女に話しかけるのだった。

11・買い物

「街に行くから、着いて来てくれない？」

夜が明け、そう言った僕にアストリアは相変わらず無視。

「ちょっと買い物とかしたいんだ」

無視。

「だから、お願い」

無視。

「お昼は外でお肉を買おうと思ったんだけど……」

ピクン。

「一緒に来てくれないのなら……仕方ない。普通にパンだけにしようか」

ピクン。

面白いぐらい反応するアストリア。

「仕方ありませんわね。あなたが命令するんですもの。奴隷は主に服従ですから」

そう言いつつも上機嫌で身支度を始めたアストリア。
そんな彼女を可愛い　　と思ってしまう僕は可笑しいのだろうか？

もし、僕に娘がいたら友人が娘を溺愛するだろう　　と言っていたけれど、今更になって僕もその言葉に同意する。

あの時は、必死に否定したけれど。

「それで、今日は何をしに行きますの？」

本当にお肉が絡み始めると、饒舌になるなアストリアは。

「アストリアの物を買いに行くんだよ」

「え？」

「本当ならすぐに足りない物を買に行かなくちゃいけなかったんだけど、後回しにしていたから、今日、行こうと思うんだ」

僕がそう言っても、未だにアストリアはきょとんとしている。

「あれ？　足りない物とかない？」

男には必要な物でも、女の人にとっては無くてはならない物もあるだろうから、提案したのだけど……何か可笑しかったのかな？

「奴隷のためにお金を使うのですの？」

「うん、そうだけど」

「……………そうですか」

急にテンションの低くなったアストリアに困惑しつつも、僕も身支度を始めることにした。

宿を出た僕とアストリアは二人で色々な所を周って行った。
傍から見れば、二人でデートしているようにも見えたかもしれない。

さすがに女物の下着を売っている店に入った時は多少、狼狽してしまっただけで、それ以外は特に何もなく必要な物を揃えて行く。
宿を出る時はムスツとしていたアストリアだったけれど、今は口の端が少し上がっているところを見ると機嫌を直してくれたみたいだ。

今は昨日、アニーさんと入った喫茶店らしき店に寄って少し休憩している。

アストリアが紅茶みたいな飲み物を飲む姿は何と言いか様になっていた。

そういえば

「アストリア。アストリアって戦う時に必要な物ある？」

僕の魔法は基本的に影を媒体に使うから必要ないけれど、普通に考えて剣、槍、弓などの武器に魔法の力を宿して戦うとかRPGのゲームとかでは良くあることから、もしかしたらこの世界でも、そうかな？　と思って聞いてみた。

僕の言葉を聞いて少し考え込むアストリア。

そんな考え込む必要あるのかな？

「……では、弓が欲しいですわ」

「弓か。分かった。買いに行こう」

「良いんですの？」

僕の返答が意外だったのか、逆に聞き返されてしまった。

何か変なことを言ったかな？　もしかして、RPGのゲームを参

考にしたのが間違っていたかな？

「普通、奴隷には安い剣を支給するのが当たり前、と聞いていたもので」

「ああ、そういうことか」

確かに、一回買えば結構長い間、使用できる剣に対して弓は使えば使う程、お金がかかる。矢を買わないと使えないのだから。

だけど、使い馴れていない武器を持つよりも使い馴れた武器を使わせる方がお互いに生き残れる可能性が上がる、と思うんだけど。それをアストリアに質問すると、アストリアは少し言いづらそうにしながら

「奴隷など使い捨てですから」

そう言った。

確かに、楯として使うなら、上等な武器を持たせるのは逆にダメか。そもそもアストリアのような可愛い女の子は娼婦にさせられて、そういう所に一切だしてもらえなくて終わりか……

今、考えてみれば、なぜ、ジョゼフさんはアストリアを娼婦にしなかったのだろうか？ 普通に考えて娼婦にした方が数年先にはアストリアを買ったお金が返ってくるだろうに。

「……なぜ、わたしを娼婦にしなかったのだろうか？ と疑問に思っているような顔ですわね」

ん？ 心を読まれた？

「大丈夫ですわ。わたしはあなたの心を読むことなどできません。

今までのあなたの言動から推測しただけです」

「そうなの。アストリアって何気に凄いやね」

「そんなことはありません。国の長になるべく、色々教え込まれていただけです。あなたも教えてもらえば、ある程度、会話した人間がどんなことを考えているか推測くらいはできるようになりますわ。まあ、ほとんど占いのようなレベルですけど」

お肉を後、少しで食べれるせいかアストリアがまた饒舌になっている。

僕としては喋ってくれるのはありがたいことなので、文句を言うつもりはない。

「そうなんだ。それで、どうして？」

「奴隷を娼婦にすることは禁止されていますの。もちろん、法の裏では色々なことがされていますが、あのような大きな商会、ましてや領主と親交がある商会が行うにはリスクの方が利益よりも大きすぎます」

そうなのか。やり方によっては色々とおあるような気がするけれど……。ああ、そうか、やれなかったんじゃないか自重したんだ。

おそらく、アニーさんの恋人の一件が口封じされている。としても、どうしても噂はたつてしまう。

そんな時に商会は裏で娼婦の取引をしている、などと騒がれたら商会の信用問題だ。

そういう意味でも僕は運が良かったのだろう。

あれ？　だけど、それじゃあ……

「初日の夜、アストリアは僕に純潔を奪われる　とか言ってたけれど、あれはいいの？」

「奴隷は命令されれば、その命令が絶対ですから」

そうか。

僕がアストリアの純潔を奪おうとも、犯罪に関係のない　つまりは人を殺して来い、などという命令以外は聞かなければいけない例え、それが主人の犯罪行為を黙っていないさい、と言われたもので。アストリア自身が犯罪をする訳ではないから問題ないんだ。

ただ、どの範囲までの命令が犯罪になるのか疑問は残るけれど。

「それじゃあ、一端、荷物を宿に持ち帰ってから昼食をとった後に武器屋に行こうか」

「分かりましたわ」

武器屋に行つて金貨を払えば、またインフレーションに拍車をかけるような気もするけれど、実はインフレーションの心配は当分なくなつたんだ。

閉鎖された空間の街で大量の金貨をばらまけばインフレーションになる　と思つた僕の考えは甘かつたのだ。

街の人に聞いた限り物価が急に上がったという話しは聞かない。

つまりはランド商会在上手くやってくれている　という見方もできるけれど、アストリアとあの騎士を売った金を持ったアストリアの元護衛達は、この街で会わない。

彼らはアストリアと騎士を売つて手に入れた金貨をこの街では使つていないんだ。

つまり物よりもお金の価値が上がるデフレーションがこの街の中で起ころうとしていた。そこに僕が現れ、金貨を商会に渡した。

このことにより、僕はインフレーションが起こるかも、と危惧したけれど、考えてみれば、その出て行つたお金はこの街に留まつていないため、少し物の価値が上がるかな？　ぐらいだろう。

もちろん、そのようなことが毎日起こっているため本当にインフレーションもデフレーションも起きない。用は僕の考え過ぎだった

のだ。

だから、金貨百枚を一気に使ったりしない限り、大丈夫だろう。少し、お金儲けの仕方も考えているし。

そうそう、なぜ、僕の影の中に荷物を入れず一度、戻るかと言うと、僕の影の力は隠す事に決めた。もちろん、必要最低限、宿の中の自室などで練習のために使うけれど、人前では極力避ける。

僕の魔法が広まれば冒険者とかと喧嘩した時に不利になるのは、もちろんのこと、アストリアの話で僕以外に周辺各国に影の魔法を使える人はいない、と聞いたこれが問題だ。

どこかの貴族に話しを聞かれて珍しいから捕まえられたら、たまったもんじゃない。

珍しい物を手元に置きたがる馬鹿は、どこの世界でもいるはずだから。

そんな訳で、宿に帰ってみたら、アニーさんが受付の近くで知らない男と喋っていた。

もちろん、僕はアニーさんの恋人でも何でもない訳だから、そんなことを気にする必要はないのだけれど、僕が宿に帰った時、僕に自分の方が上なんだぞ　というような意味合いのこもった視線をアニーさん越しに向けて来たので少しムカツとした。

あれは僕がアメリカで詐欺師に騙されかけた時、先輩に怒られているのを見て、僕を笑っていた奴の目に似ているので絶対、そういう目で見ていると断言できる。

そんな僕を見て、受付にいた女将さんが

「……あれは、アニーのもう一人の幼馴染だよ。顔は良いんだけど性格が良くないからアニーも実は嫌っているんだよ」

と耳打ちしてくれた。

言われてみれば、アニーさんはあまり笑っていない。

「ランド商会に就職していたんだけど、一度、やめて、他の街に行っていたんだけど一週間程前からこの街に戻って来たらいいんだ」

とも教えてくれた。

別に気になりませんよ、と言おうかとも思ったのだけれど、どうでも良い情報でも、ないよりある方が良いのでとりあえず覚えておくことにした。

それからアストリアを引きつれて、また、昨日行った露店へと足を進める。

「そういえば、アストリア」

「何ですか？ まさか、今更、お肉の件を無かったことにする、と仰られる気ですか！？」

戦慄　今の彼女の顔はまさにそれだった。

「いや、違っちゃって、逆」

「逆ですか？」

「昨日は僕が勝手に選んじやったけど、今日は一緒にいるんだから、アストリアも選ぶ？」

「良いんですの！？」

アストリアが突然、僕に詰め寄ってくる。

「う、うん」

さすがにこれは予想外だったので、ついつい、後ろに下がってしまふ。

「どんなお肉でも買ってくれますの!？」

「食べきれる量なら」

「ありがとうございますっ!」

この世界に来て、初めてお礼を言われたのが、好きなお肉を買ってあげるよ　というものだったのは、さすがに悲しかった。

「では、まず、あれが食べたいですわ!」

アストリアが指差したのは焼き鳥のようなお肉だった。匂いからして鳥肉だとは思っただけけれど、どんな鳥を使っているかは分からない。

「うん。いいよ」

小走りに、露店に近寄って行くアストリア。本人は普通にしているつもりだろうけど、傍からみれば浮かれているのが、まる分かった。

「お、兄ちゃん。彼女とデートか？」

露店の少し筋肉質なおじさんは気の良さそうな人だった。

「いえ、どちらかといえば、今は妹のおもりみたいなものです」

こんなことを言えば普段のアストリアは激怒するだろうけれど、今はお肉の方に目が行っていて、僕とおじさんの会話など聞いてい

ない。

そんなアストリアの様子を見て、おじさんは苦笑してから

「六本、銅貨一枚でいいぞ。頑張れよ」

と言つてまけてくれた。

確かにデート中に彼女がご飯に夢中だということは男の方に興味が
ない　という意味だからな。僕とアストリアの関係を誤解して
いる、おじさんからすれば僕は可愛そうな人なのだろう。

もちろん、わざわざ、まけてくれると言っているのに、それを断
る理由もなく、僕は銅貨一枚払い、焼き鳥を受け取りアストリアに
渡す。

彼女は嬉しそうに両手に二つの串を持ち、どちらから食べようか
迷っている様子だ。

そんな光景を僕とおじさんは、和やかに見守るのだった。

12・迫る歪み

「そういえば、アストリア、あの人の武器って何？」

「あの人はフランカのことですか？」

アストリアと昼食を終えた僕は武器屋に向かっていた。

結果的に言えば、アストリアは凄^みい量のお肉を食べただけで、露店の人達は皆、お肉よりも興味の無い僕に同情してか、まけてくれたので使った額は昨日の昼食費と同額だった。

まけてくれるのは、ありがたいのだけれど、なぜか釈然としないのは僕の勘違いだろうか？

「あの騎士っぽい人なら、そう」

「フランカは基本的に何でも使えますが、強^しいて上げるなら剣ですわね」

「剣か……」

確かに何となく剣が似合いそうなイメージがする。

ちなみに、未だにアストリアは上機嫌なため、饒舌だ。

こんなことなら毎日、お肉を昼食に食べさせるのも良いな、と思っってしまったのは悪くないだろう。

ちなみに宿屋のご飯では、基本的にお肉がメインの定食を選んで、あまり、お肉は入っていない。考えてみたら、コストの高いお肉を大量に使うと宿からすれば赤字になるだろうからしないだろう。とりあえず、どうやって値切ろうかと考えながら武器屋を探して中に入る。

僕も短剣、というよりもナイフくらいは欲しいので、それと後日、剣を買いに行く。とでも言えば、二割引きにでもしてくれないかな？

お金はいくらあっても困ることはないから、できるだけ節約したいケチな僕だった。

そして、やって来た武器屋は一目で武器屋と分かるようになっていた。

だって、看板に剣の絵が描かれていたんだから。確かに、この方が分かりやすくていいだろう。

それなりに年季の入った木造の扉を開けて中に入ると、中は壁に武器が並んでいた。そして受付に座っていたのが、これまた筋肉むきむきのおじさんだ。どうでも良いけれど、この世界の男の人は大抵、むきむきの気がする。僕の気のせいかな？

文化レベルが中世のヨーロッパくらいなせいで、力仕事が多いからだろうか？

本当に文化レベルが中世かどうかも怪しいけれど。

「いらっしやい。どんなものを探しているんだ？」

決して愛想が良いとは言えないけれど、荒くれものが多いらしい冒険者を相手にするならこれくらいがちょうど良いんだろう。

「ナイフと弓を」

「そうか」

そう言つて、男は受付の下からナイフを数個とりだす。

「見てもいいですか？」

「ああ、いいぞ。ちなみに、弓はその壁にかかっているのが全部だ」

僕はナイフを手にとり、鞘というより銃をいれておく革でできたフォルダーに近いケースの中からナイフを取りだしてみる。

確かにそれなりに切れる代物だろうけど、ホテルの厨房からちよくちよく果物がまるで豆腐のように切れる果物ナイフを貸してもらっていた僕としては果物ナイフよりも劣る代物だった。この世界のナイフの基準が分からないので何とも言えないが。

「不服そうだな」

「分かりますか？」

アストリアといい、この人といい、気を張っていない僕の態度は案外、分かりやすいものなのかもしれない。

「ジョゼフの旦那が珍しい黒髪のやり手の男が武器を買いに来るかもしれない　　と言っていたから警戒していたんだけど、俺の取り越し苦労か？」

「取り越し苦労なら、それに越したことはないんじゃないですか？」
「かあ、その切り返しか。そう言われたら、俺はおまえが演技しているのか、本当にただ不満なのか分からなくなった。それも、今度は雰囲気からどう考えているか読み取れない。そういうところがジョゼフの旦那に認められたのか」

「僕は普通ですよ」

「俺みたいな奴を相手に、そこでにこやかに笑えるのは普通の奴じゃねえよ。普通は少しはびびるって」

それにしても、ジョゼフさんが武器屋のこの人と知り合いでしかも、僕の話をしてくれていたなんて……一個借りかな？

貸すのはいいけれど、借りるのは苦手なだけだな……

「しかし、不思議な野郎だな、おまえさんは。俺は長い間、武器屋をやっているから、そいつの実力がだいたい分かるんだけど、おまえさんのは分からない、言うなれば戦い馴れていないのに、ナイ

フの扱いは上手いみたいな感じだ」

「戦い馴れてはいませんが、ナイフの扱いには多少、心得がありますから」

「そんな奴が何で戦闘用のナイフを？」

「近いうちにまた旅に出ようと思ひまして」

「そのための準備期間って訳か。分かった、多少、値が張っているのなら、それなりのナイフを今、用意するが、どうする？」

「お願いします」

そう言つて、一度、店の奥の方に入つて行く、男。

さすがに不用心じゃないか？ と思つたけれど、考えてみれば今の店の中にいるのは僕とアストリアだけ、ジョゼフさんに紹介されて多少、信頼があるから問題ないのだろう。

「アストリア、どう、氣に行つた弓はあつた？」

「ええ。これを」

アストリアが指差したのは何も装飾がされていない普通に剣や槍と一緒に壺に入れられている弓だった。

「え？ これで良いの？ 壁に飾られているのじゃなくて良いの？」

「問題ありませんわ。それどころか、あんな物を使うくらいなら素手で戦つた方が幾分かマシですわ」

「ほう、嬢ちゃん、弓が分かるのか？」

いつの間にか、戻つて来た男の人は僕達を睨んでいた いや、これは睨んでいるんじゃない僕達を見極めている？

「ええ、そこに飾られているのはクズですわね」

「……一応、商品なんだがな」

「関係ありませんわ。あなたもそれが装飾だけの弓であるのが分かってるのではなくて？」

「……かあ、参ったな。坊主だけじゃなくて嬢ちゃんもそれなりの使い手　いや、坊主よりも数段上だな。分かった、あんたにもきちんとした、弓を売ってやるよ」

「いえ、その壺に入っている物が良いですわ」

「……気づいたのかい？」

「ええ」

「そりゃあ、おったまげた。今まで気づかれたことはないのにな。分かった金貨二枚で売ってやるよ」

「そんな安く売って良いんですの？」

「ああ、まだ奥にあるからな」

二人のやりとりを呆然と聞いていた僕だけれど、二人の会話の意味が分からない。

「だけど、とりあえず、金貨二枚で弓を買ったことだけは分かる
二百万の弓？　滅茶高くない？」

「ほら、坊主、坊主にはこれだ」

そう言つて男が投げてきたナイフを持つと　重かった。

「俺の店にある最高純度のナイフだ。切れ味は保障する」

ケースからナイフを抜くとそれは黒い刀身を持っていた。見ただけで分かる、これはホテルで借りていた果物ナイフと同様　いや、それ以上に切れる。そう思わずにはいられない魅力がそこにあった。

「それは金貨一枚だ。金貨三枚も買ってもらったんだ。矢、三十本はサービスだ。言つとくが、原価が高いんだ。まけられないぜ」

値切る前に釘を刺された……だけど、アストリア達の時のように不良品ではないみたいだから、突破口はなしか　売らない、と言われた方が問題だからな。聞いた話ではここ以外にこの町に武器屋はないらしいから。

僕は腰につけておいた袋から金貨を三枚取りだすと男に渡す。

すると、男は弓を壺から取りだし、袋に包み、持ち運びやすいようにしてくれた。それをアストリアは矢と一緒に受け取る。

これで、装備は今のところは完璧かな？

店を出た僕は

「アストリア、その弓ってそんなに凄いものなの？」

アストリアと男の話で気になっていた質問をした。

「凄いどころではありませんわ。凄すぎる品物です。金貨をいくら出しても手に入りませんわ。これはオークから作られたものですか」

「オーク？」

「最も強い軍事力を持つ　ラスの帝都にある神霊樹のことです。数年に一度、枝を折ることが許され、その折られた枝には魔力が宿る　と言われていますの。その枝で作られた弓は本当に魔力が宿っているかは分かりませんが、その弓で放たれた矢は、もちろん使い手により左右されますが、どんなモンスターでも退けられる、と

言われていますわ」

……そんな凄いものだったのか。そんな物を金貨二枚で売ってくれて良かったのか？

「まあ、この世界で弓を使っている者は少ないので全体的に需要が少ないのも事実ですが」

「そうなんだ」

そんな話をしながら宿に戻って行く最中

「その君」

呼び止められた。

この世界で僕と接点がある人間は限られている。ましてや、同世代の人間で僕のことを呼び止めるのはアストリアかアニーさんくらいだろう。アストリアはもちろん、今、僕の斜め後ろに居るのは見えているから、消去法でアニーさんということになる。だけど、声をかけて来たのは男だった。

僕は不審に思いつつ、背後を振りかえると、そこにいたのは

「やあ」

アニーさんの幼馴染　と言われていた男だった。

「どうも」

僕は不審に思いつつも、アストリアを僕の影に隠す。

どう嫌かは分からないけれど、アストリアを見る、目の前のこいつの瞳は嫌いだった。

「君はアニーのことを良くしてくれたみたいで、礼が言いたくてね」

まるで自分の物のような言い方……

女将さんが、目の前の男の良い所が顔だけだ、と言った理由が少し分かったような気がする。もちろん、僕はアニーさんの何でもないので、僕が腹を立てるのもお門違いなのは分かっているけれど。

しかし、いくら、偉そうな態度の相手でも、初対面の相手にいきなり喧嘩を売る程、僕も子供じゃない。

腰につけているナイフの存在を意識しつつも

「いえ、僕もアニーさんにはお世話になりましたので」

あんたには礼を言われる筋合いはない　という意味で言ったんだけど、上手く皮肉が上手く伝わらなかったようだ。

目の前の、こいつは嬉しそうに

「アニーは俺以外の奴にも優しいからな」

そう言った。

「そうそう、もう、おまえがアニーのことを気にかけてくれる必要はないからな。これから俺がアニーのことを支えていくさ。この俺、アーロンがな。おまえや、アドルフではなく」

そう言って、笑ってどこかへ去って行った。

13 浮き出る影

夕食を終えて、食器を食堂に返しに行く最中にアニーさんに出会った。

「あ、カケルさん」

初日、出会った時の雰囲気完全に戻っている　おそらくアストリアを連れていないからだろう。

「すみません、食器を運ばせてしまって」

「いえ、僕が無理を言って部屋で食事をいただいているんですから」

「そうだったんですか。あ、初日にカケルさんにチップをもらったじゃないですか。それでついに、明日、お父さんが近くの村でする買い出しに連れて行ってもらえることになったんです！」

「そうなの？」

そういえば、彼女はチップをもらったなら街の外へ連れて行ってもらえるような話だったわけ。

「はい。外の世界を見て回れる何て嬉しいですよ」

彼女の瞳は本当に嬉しそうで、まるで修学旅行を前日に控えた子供のようにだった。

僕も初めて飛行機に乗る前夜は同じようにうきうきしていた記憶があるから、アニーさんのことを子供　だと笑えないけれど。

「そっか。楽しんで来てね」

「ありがとうございます」

彼女は軽くスキップしながら、受付の奥に入って行った。
その時、ガタツと背後で何かが倒れる音がした。

ふり返ると、植木鉢が不自然に転がっている。

誰かいたのか？

女将さんなら、隠れて僕達の会話を聞いたりはしないだろう。

なら誰が？

そんな疑問を胸に抱きながら、魔力の流れを掴む訓練をするために食器を食堂に返して自室に戻る僕だった。

次の日になり僕とアストリアが出かけようとした時、ふと荷馬車の近くに、アニーさん、アニーさんのお父さん、アーロンがいた。

……おそらく、昨日行っていた買い出しに向かうのだろう。

なぜ、アーロンがあのだの二人と一緒にいるかは知らないけれど、宿の運営事情に僕が首を突っ込むことはできず、胸に突っかかりを残しつつも出かけようとした時、女将さんが珍しく宿の外に出て来て、僕に駆け寄って来た。

「ちょっと待っておくれ」

「はい？」

こんなことは初めてだったので、少し困惑してしまう。

「今日、旦那とアニーがラットアに野菜の買い付けに行くんだけれど、どうして、アーロンと一緒に行くか、あんた理由を知っているかい？」

「いえ、知らないです」

「そうかい、引き止めちまって悪かったね……もし、護衛を雇うにしても、もっとマシな奴がいただろうに……」

後半、まるで女将さんはギリギリ僕達が聞きとれるくらいの大きな声で話した。

護衛……もしかして、アーロンって奴はギルドに所属しているのか？ 確かに僕がここまで歩いて来る時には人が通る道ではモンスターには出くわさなかったけれど モンスターが出る確率は確かに零じゃない。

大事な一人娘のアニーさんを連れて行くなら、護衛を雇うのも当然だけれど……何だ、この胸のモヤモヤは……

僕は弱いから護衛なんてできるはずがないのに……

それから、女将さんは急いで旦那の元へ行った。何か言い争っているようだけれど、女将さんの方が劣勢みたいだ。

額に青い筋が浮かんできている。

そんな光景にみいってしまった僕はジツとした視線を突然、背後から受けた。

アストリアだ。すっかり彼女を待たせてしまっていた。

「あ、ごめん」

慌てて今日の目的地に向かい始めるのだった。

今日の目的地はランド商会の本部だ。

先日、奴隷を売っている館には行っただけで本部には行っていないので、一度、行ってみることにした。

これから、ある程度のお金を得るために行商などを行うつもりだけれど、僕には物価が一つ分からない。頼りになりそうなアストリアもさすがに商人達の仕入れ値などは知らない。

だから、リサーチしに来たのだ。

商会の本部なら、ある程度、分かるだろうと思ったから。

商会の本部は奴隷を売っている館よりも見劣りするけれど十分立派な洋風の屋敷だった。

中に入ると、驚いたことに商人らしき人達が、まだ朝も早い時間だというのに数人いてランド商会の商人らしき人と交渉しているようだった。

なぜ、ランド商会の人間かと分かったかと言うと二人組になっている片方は様々な服装の人がいるが、片方は必ず、青色の服を着ていたからだ。いわゆる制服なのかもしれない。そういえば、奴隷を売っていた館の受付の人でも青い服を着ていたような……

そんな時だった。

「カケル殿」

六日程前に聞いた声がまた聞こえて来た。

「あ、ジョゼフさん。おはようございます」

「ええ。おはようございます。カケル殿。どうされましたかな？」

例の商品の引き渡しは明日だった、と思うのですが」

「いえ、今日は他にも何か良い物がないか、見に来たんです」

「ほう、それは……」

「もちろん、食料品などですよ。この頃、店で買っぱかりで物価を確認していませんでしたから。確認をとるのは信用のおけるジョゼフさんの所で、と思いましてね」

「そうなのですか……ですが、残念ながら、本日は残念ながら有益な商談はできません」

「え？」

「カケル殿に下手に隠し事をする、後が怖いので話させていただきますよ。ただ……」

ああ、他の商会に入っていない商人達がいるから、話しづらいのか。

僕はアストリアを伴って、ジョゼフさんの後について行く。

通されたのは、それなりに豪華な部屋だった、前にジョゼフさんと話していた部屋とは比べ物にならないけれど。

「そつえば、本題に入る前に、少し質問させていただいても、よろしいですか？」

「どういったご用件かによりますが」

「実は、奴隷についての安全性です」

「え？」

ジョゼフさんは案の定、キョトンとした。

アストリアにはジョゼフさんと次に会ったら、この話をする
と事前に言っておいたので、問題ない。

「その奴隷が何かそそうでも？」

僕の背後に立って僕とジョゼフさんの話し合いをみているアストリアの方を睨むジョゼフさん。

「いえ、アストリアは物凄く、良くしてくれています。満足度で言えは百点です」

「それなら、なぜ……」

「奴隷に殺された人の話を聞かしまして」
「っ!？」

ジョゼフさんの目の色が変わった。

「もちろん、先に言っておきますが、僕は奴隷制度を反対する者ではございません。逆に購入している側なので賛成派と思ってください。しかし、道を歩いている最中に奴隷に殺されては、たまりませんので、真実の確認がしたいのです」

僕の言葉を聞いて考え込む、ジョゼフさん。
さすがに即答はできなかったようだ。

こくこくと時間は進む。早い時間に宿を出たので時間は問題ない。僕はソファアの背もたれに体重を預けながら、ジョゼフさんの言葉を待つ。

沈黙はこの場合、肯定の意味でもあるから、話さない　という選択肢はないと思うから後は時間の問題だ。

チク、チクとこの世界の時計が時を刻む音だけが部屋に鳴り響く。まだ、アストリアに時計の読み方を教わっていないので、何時かは分からないけれど。

「……………分かりました。話させていただきます」

そうジョゼフさんが言った時、侍女らしき人が二人分の紅茶らしき飲み物を持ってきてくれた。

ジョゼフさんは侍女らしき人が退室したのを見計らって飲み物に口をつけてから

「あれは、数年前の出来事です。わたしが今の地位になってからまだ間もない頃でしたので良く覚えています。奴隷を扱う者 特に犯罪者だった奴隷には絶対にある命令をしなければなりません」

ジョゼフさんの瞳には後悔の色が漂っていた。

「しかし、国から首輪がつけられ、帰って来た奴隷には、真っ先にその命令を刻まなければいけないのに、新人に任せただけに……その命令は刻まれませんでした」

「その命令とは？」

「人を殺すな、犯罪をするな、です。もちろん、犯罪者ではない奴隷には無用な命令ですので大抵はしないのですが、罪人奴隷の場合の話ですが」

「……………」

「あの時のわたしはどうかしていた。今の地位につき、色々と忙しくなっていたのは確かですが、まさか、その最も大切な事を忘れてしまうような新人に罪人奴隷を預けるなんて……………」

おそらく、罪人奴隷を新人に預けたのはジョゼフさんではないだろう。下っ端の者がそうしたのである。いちいち、商会の重役が高く売れないであろう罪人の奴隷を運ぶ下っ端を選ぶはずがない。

「そのために……………あのような悲劇が起きたのです。あの事件以降、館を本部とは別の場所に移し、奴隷の管理も徹底しているのです。

もう二度とあのような事件を起こしたりはしません」

「分かりました。それで、その命令をし忘れた新人というのは」

「申し訳ありません。個人の情報を商會が売る訳にはいけないんです」

「そうですか……」

アストリアの言う手引きした人間がいるか、どうかを調べるチャンスだったんだけどな……こう言われてしまったら何も言えない。逆に言えば僕の情報も他人には売らない　という意味合いも入っているのだから。

この件は他の情報屋が何かに調べてもらうことにして

「商談ができなくなっている、とは？」

「ええ。実は一昨日からゴブリンが大量発生しましてね。こちらに向かっている荷馬車が襲われて全滅したんです。ゴブリンは知つての通り、一体、一体の戦闘力は低いですが集団で襲ってきますので討伐隊が今日の午後から討伐に向かいますので、それまでは商品があまり届かないのです。だから在庫を持っていた商人達が朝から売りに来ているんですよ」

そうなのか……道理で……

ん、待てよ。

「アストリア、アニーさん達が向かった村を覚えている？」

「ええ。ラットアと言っていましたわ」

僕の切羽詰まった表情に少し、たじろぐアストリア。ただ、嫌なピースがパズルにはまったんだ。

できれば、僕の考えが間違いであって欲しい。

「な！？ ラットアですって！？ 馬鹿な……あそこ方面にゴブリンは出たんですよ……どうして……」
「っ！？」

完全に嫌なピースがはまってしまった。

普通なら門の所で止められるはずだけど、向こうが商會を悪い意味で出しぬける頭を持っているなら、おそらく……上手いことして門を抜けているはずだ。

「ジョゼフさん、もしかして、新人の名前はアーロンという名前ではなかったですか？」

僕の言葉を聞いて、僕が奴隷の話をし始めた時よりも驚くジョゼフさん。

「なぜ、彼の名を……」

その答えで決まった。

どうする？ 僕が行った所で、助けられるか分からないし、そもそも、元の世界に戻りたい僕がデメリットを冒してまで向かう必要があるのか？

頭が混乱する。

どうするべきか？

助けに行くべきだ！ と叫ぶ 善意を持った自分がいる。

見捨てて現実に戻る方法を探せよ！ と叫ぶ リアルな僕もいる。

「何を迷っていますの？」

アストリアが初めて自分から話しかけてくれた。

「あなたは馬鹿でお人好しですから、助けに行かなければ、きっと死ぬほど後悔しますわよ。しないで後悔するくらいなら、してから後悔した方がよろしいのでは？」

アストリアの言葉でハツとする。

確かにそうだ。

どうせ後悔するのなら、何かして後悔しよう。そう思った僕は頭をフルに回転させようとする。

相手は荷馬車なんだ。今から向かって、追いつけるとは限らない 待てよ。ここは商会の本部だ。

「ジョゼフさん、馬をください」

お金ならある 自分で稼いだお金じゃないので偉そうに言えた義理ではないけれど、こんな時に使わずに何時使う？

「わたし共も無関係な話ではなさそうですのでお貸しします」
「ありがとうございます」

これで追いつける可能性がでてきた。

「ただ……考えてみれば、もし、僕が行っても勝算はない。そうかと言って、騎士の人をとりに行っていたら……ダメだ時間がかかりすぎる。」

「わたしも行きますわよ。わたしはゴブリン風情に遅れをとりません。本当ならどうでも良いのですが、あの子にはまだ、わたしも謝っ
ていまんもの。よろしいですわよね。ご主人様」

「あ、うん、ありがとう」

「ジョゼフさん、ラットアの場所を教えてください。すぐに向かいます」

「分かりました。わたし共も討伐隊をすぐに動かすようにギルドに掛け合ってみます」

「そうして、僕にとって異世界に来てから最も長い一日が始まりを告げるのだった。」

14・馬鹿な決闘

「これが馬……」

「どうしたんですの？　早く乗ってください」

アストリアと共にランド商会の裏手　　というより街の門の外に
案内された。

何でも荷物を有事の際に運び出すための特別な出口をランド商会
は所有していたのだ。

領主と親交があり、信頼があるランド商会だからこそその所有物。
馬で街の中を移動できないため、これでかなりの時間を短縮できる
ことになるのだけれど……

今更ながら気づいた。

「アストリア……僕は馬に乗れない……」

「はい！？」

「考えて見たら実際に見るのも初めてだ……」

日本でも乗馬を趣味にしている人はいる　　と聞いているけれど、
あいにく僕にそんな趣味はない。

電気用品店でダイエツト用品として擬似的に乗馬を再現する機械
には乗ったことがあるけれど、あれとはまったく違うだろうし……

「乗れないのに、馬を要求したんですの？」

「う、うん……あの時は勢いというか……何と言つか……」

「仕方ありませんわね……一番、力のある馬にわたしが一緒に乗っ
てあげますわ」

「ありがとうございます」

それから、ランド商会の人に言って二人乗り用の馬を急遽、連れて来てくれてから僕とアストリアは二人で一匹の馬に乗る。そしてラットアの場所を聞き、馬を走らせる。

もちろん、馬を走らせるのはアストリア……

僕はその後ろで彼女のお腹に手を回して捕まっているだけ。

……何と言うか、僕ってかっこ悪い……

ラットアの方角は僕が初めて、この世界にやって来た時にいた湖の方角だった。

おそらく、あそこで会ったゴブリンの一味が繁殖、あるいは元々、相当な数がいたのだろう。

あの時　街に来て、すぐに門のところの人に相談しなかった自分が憎い。

なぜ、森の中にいたのか？　と聞かれた時、困る　という考えを尊重してしまった自分が。

アストリアが背中に背負っている弓が僕の身体に時々、当たって痛いんだけど、それくらいは我慢しないとイケない……だろう。

「アストリア」

「舌を噛みますわよっ！」

僕の言葉はそうそうに切り捨てられた。

今の間にアストリアがどんな魔法を使えるのか聞いておきたかったんだけど……

だって考えてみたらアストリアに魔法のことを師事してもらっているけれど、アストリアが魔法を使っているところを僕は見たことがないんだから。

馬がどんどん加速していくのが分かる。

僕は直接風を受けていないけれど、アストリアは直接顔に風を受

けている……目を閉じてしまわないのかな？
そんなことを考えていても、馬は走る。

「きゃあああああ！」

遠くの方で悲鳴がしたのが聞こえてきた。

それを聞いた瞬間、アストリアに抱きついている手に、今までよりも力を入れてしまう。

「分かっていますわ」

そう小声で呟いた僕から見えるアストリアの横顔は一瞬、見惚れてしまうくらい格好の良いものだった。

僕は顔を少し、横に出して、前方の様子を見ると、アニーさんのお父さんが剣を抜いてゴブリン達と戦っている。その顔に余裕の色はない。

今朝、見た宿の荷馬車は壊れきっていて、ゴブリンが荷馬車の中の作物や日用品をぶっしょくしている。

アニーさん　は体にゴブリンが数体、飛びついている。

それを必死に振り払おうとしているけれど、小人のような姿なりをしているゴブリンの力が思いのほか強いせいか、振り払えない様子だ。そして、一人足りない。

僕達が宿を出る時に確かに一緒に居たはずの男が。

馬は減速して止まる態勢に入った。

「アストリア！」

僕は馬から飛び降りると、走りだす。

飛び降りた拍子に前周りのような感じで転がってしまって、いく

つか手や足に擦り傷ができてしまった　　かもしれないけれど、関係ない。

僕は走って、彼らの元へ急ぐ。

「馬鹿っ！」

後ろから、アストリアの声が聞こえてくるけれど、僕は腰のナイフを取りだすと、アニーさんに飛びついていてるゴブリンを追い払うべく走り続ける。ここから影の魔法を放ったらアニーさんまで傷つけるかもしれない。

「アニーさん！」

僕の声はアニーさんには届いていないみたいだ。

僕は二十歳を超えたあたりから走ることは滅多になかった。それなのに、息が一切上がらない。

それどころか、だんだん、周りの動きがスローモーションのように見えて来る。

もつと、だ。もつと早く　彼女の元へ。

武器屋で持った時には重い　と感じた黒い刀身のナイフがまるで木の枝みたいに軽い。

これなら　いける。

「うわあああああ！」

僕はアニーさんの傍まで行くと、ナイフを思いっきり、ゴブリンの頭に突き刺した。

思った以上にナイフの切れ味が高かったためか、簡単にゴブリンの頭は血を噴き出した。

手に頭を突き刺した感触が襲ってくる。

吐きそう、だ。

だけど、まだ……

「あああああああああああああああつ」

もはや、何の叫びか分からない声を上げながら、ナイフをゴブリンの頭から引き抜くと、アニーさんの服に捕まっていたゴブリンに突き刺そうとする。しかし、そこにゴブリンはいない。

いつの間にか、アニーさんから、離れて僕に飛びっこう　と準備している。

それがスローモーションで見える。

「うおおおおおおおおお」

飛びっこうとジャンプしたゴブリンに向かってナイフを突き出す。それは決してスマートじゃない。

動きは見えているのに、どうやって斬っていいか分からない僕にはそうするしかない。

また、嫌な感触が手に伝わって来る。

ああ　また殺してしまった。

吐き気が凄い。

二匹目のゴブリンの帰り血を浴びてアニーさんが、こちらをきよんとした顔で見てる　のを確認すると、周りがだんだん早く動き出す　いや、これは……僕が感覚が元に戻って来ているようだ。

そう自覚すると、途端にナイフを持っている右手が重くなる。足が震えてきた。

「カケルさん!？」

アニーさんに支えられてしまった。

僕は今、倒れようとしてしまったようだ。

ゴブリンはまだ、たくさんいるのに。

かっこ悪すぎるだろ、僕。

未だに収まらない吐き気を必死に抑えながら、状況を確認する。

向こうでアニーさんのお父さんが、五匹のゴブリンを戦っている
荷馬車の中身をぶっしょくしていたゴブリンがこちらに気づいた
ようだ。

棒の先に石をつけた武器を手にとってこちらに襲いかかろうとしている。

さらに悪いことに森の中から増援がやって来た。

僕が見た限り、彼らの数は二十前後。

森で勝てたんだから、アストリアに助けてもらえば、ある程度、
いける　　と思った自分を殴ってやりたい。

たった二匹で僕は力を出し切ってしまったているじゃないか？

森からの増援より先に荷馬車でぶっしょくしていたゴブリン達が、
僕を殺すべくこちらに向かってくる。

万事休す。

僕が死ねばアニーさんはゴブリンに連れていかれるだろう　　巢

でどんなことをされるか考えたくもない。

僕は気合で震える足を使って立つ。

そしてナイフを構える。

ゴブリン達は僕の影にまだ、注意していない。これなら、後、三
匹くらいはやれる。その間にアストリアにアニーさんを回収しても
らって……

それから、討伐隊が来てくれるまで何とかしよう。

魔法を使えば生き残れる　　かもしれない。

覚悟を決めてアニーさんに向こうに見えるアストリアのところに行くように言おうとした時　アストリアが馬の上から弓を構えているのが見えた。

ディレクション・ライト
「光の分裂」

次の瞬間、光輝く矢が放たれる。

その光の矢は途中、いくえにも別れ、僕達を襲おうとしていたゴ布林達に降り注ぐ。

さらに、アニーさんのお父さんが戦っていたゴ布林達のところにも矢は放たれる。

その矢は一発も外れずにゴ布林達に命中した。

一瞬　一瞬のうちに十数匹のゴ布林達は死体になってしまった。

「凄い……」

僕はついつい、そう口にせずにはいられない。

横に居るアニーさんも呆然としている。

僕とは違う英雄ヒーローのような攻撃。助かった喜びよりも、ついつい嫉妬してしまう。

森から来たゴ布林達は自分達が劣勢になったとみるや、退散して行った。

ゴ布林達がいなくなったことを確認してから馬に乗ったアストリアはゆっくりと、こちらに近づいてくる。

「はあ、なぜ、作戦も立てずに突っ込むんですの？　わたしの矢が間に合わず一斉に襲いかかれたら、どうするおつもり？」

呆れたように、そう言ってくるアストリア。

「う、ごめん」

「本当なら許さないところですが　今回はあなたの勇氣に免じて許してさしあげますわ、ご主人様」

そう言う彼女は、会ったことはないけれど女神様のように綺麗だ、そう思ってしまう自分がいる。

それからアストリアは馬から降りて、さらに僕達に近づいて来る。アニーさんのお父さんも、怪我をしている様子は見えない。

もしかして……怪我をしたのって僕だけ？　それも馬からの着地に失敗した拍子の。

「すまない……助かったよ」

アストリアと僕に向かつて、そう言ってくれるアニーさんのお父さん。

「いえ、わたしはご主人様に言われてやっただけのこと　感謝をするならご主人様に言ってくださいまし」

「え？」

アストリアも自分の意思……

「そうか……君は奴隷なのか……分かった。助かった、ありがとう。大事な娘を失わず済んだのは君のおかげだ」

頭を下げて来るアニーさんのお父さん。

結局のところ、救ったのは僕ではなくアストリアだけの力なので、何て答えようか迷っていたところ

「娘さんを失わずに済むか、どうかはこれからですわ。出て来たらいかがかしら？」

アストリアが少し遠くの方を見ながら、そう言った。

「俺に奴隷風情が話しかけるなよ！ ちっ、おまえらさえ、いなければ、もう少しで、おっさんを殺せたのに」

木の陰から出て来たのはアーロンだった。

……やっぱり。

「……どうということアーロン？ あなたは助けに呼びに行ってくれたんじゃ……」

アニーさんが引きつった笑みでアーロンに質問する。

それをあざけ笑うように

「どうもこうも、後、少しで合法的におまえを手に入れられたのに、その作戦が失敗したんだよ。それに何でゴブリンごときの相手に冒険者である俺が助けを呼びに行かない、といけないんだ？ 俺なら楽勝で倒せる」

そう言うてから、アニーさんを睨む。

「ひっ！？」

僕はアニーさんを庇うように前に出る。

「おまえの存在も気にいらねえ、そこにいるはずだったのは本当な

「俺だっただけなのに」

ゲラゲラ笑う、アーロンに苛立ちながらも、僕は質問する。
最も聞きたかったことを。

「わざわざ、ランド商会の罪人奴隷を使ってアドルフさんを殺したからか？」

僕の言葉を聞いて意外そうな顔をするアーロン。

「ほう、分かったのか？」

アーロンの言葉を聞いて後ろでアニーさんが驚きの声をあげている……

「なぜ、そんなことを？」

「簡単だよ。アニーを手に入れるためだ。本当のところ、アニーは俺の物だった。だけど、あいつが横取りするから。大変だったんだぜ、ランド商会に入って、それなりに上司から信用されて罪人奴隷の管理をさせてもらうのは、その上、自分で一から相手にしないと先に命令を拭き込まれちゃうからな。その上、常に、二人のデートの時間を確認して、どこにいつ、現れるかもリサーチしないといけなかったんだ」

そう言ってゲラゲラ笑うアーロン。

「難しい条件を全部クリアしてアドルフを殺した方がいいが、二つの誤算があつてね。俺がランド商会をやめさせられて、街に数年は出入り禁止になった。そのせいでアニーに近づけなかったんだ。そしてやっと戻って来た時には、おまえがいた」

僕の方を指さすアーロン。

「アニーにチップをやって外に連れ出すのは俺の役割だったのに、おまえが奪いやがった。そして、あるうことか、アニーと二人で会ったりしているじゃねえか。アニーを俺だけの物にするためには、拉致しかない　と思った訳だ」

あの二人で喫茶店みたいなところに入っているのを見られたのか

……

「ゲスが……」

アストリアが横で小さく呟いた。

全面的に同意したい。

「それで、どうすれば拉致れるか考えていた時、上手い具合にゴブリンが大量発生するじゃねえか、ゴブリンにおっさんを殺させて拉致すれば、二人共、ゴブリンに殺されたことになるじゃねえか。だから、俺は俺を信用している、おっさんに俺も買い出しに同行させてくれるように頼んだのさ。昔から俺はおっさんの前だけは良い子だったから、簡単に信じてくれたぜ」

アーロンの言葉を受けて驚愕した様子のアニーさんのお父さん……

「しかし、また、おまえが邪魔しやがるのか？　女に守られるようなクズが」

「どっちがクズですよ！」

アストリアが僕の代わりに怒ってくれる。

「おまえも良い女だから、アニーと一緒に拉致してやるよ。そんなクズが主じゃ可哀そうだ」

「お断りですわ。あなたについて行くくらいなら自害した方がマシですわ」

「ほう、言うじゃねえか。まあ、今から二人共力づくでいただくから関係ないがな」

アストリアは今にも弓を構えようとしている。
そんな彼女を手で制して僕は

「アストリア、僕に行かせてくれないか？」

そう言った。

「え？」

後ろのアニーさんが素っ頓狂な声を出す。

「僕があいつを一発、殴ってくる」

「……仕方ありませんわね。あなたはわたしのご主人様なのですから、譲りますわ。ただし、負けたら承知しませんわよ」

「うん、アニーさんとアニーさんのお父さんをお願い」

「分かりましたわ」

「ま、待ってください、カケルさん、アーロンは昔から剣術に関しては周りよりも強かったんです！ 一人で戦ったら……」

アニーさんがそう言ってくれるけれど、僕はふり返って

「大丈夫」

そう一言だけ言って、アーロンに向き直る。
僕が覚悟しているのを分かったのかアニーさんのお父さんは何も
言わない。

「はっ、てめえみたいな奴に倒される俺様じゃねえよ」

「殺さないさ、きつちり罪は償ってもらう」

「威勢だけは良いみたいだな」

剣を抜いて、自分の剣を舐めはじめるアーロン。

その姿を見て、僕は背筋に汗が流れる。

感覚的に分かる。

こいつは僕よりも格上だ。

それ以前に、生き残ることを第一に考えたら、こんなことをする
のは馬鹿だ、と僕の考えを罵倒する自分もいる。

そもそも、アストリアの先ほどの魔法で目の前の男を殺してしま
えば、終わりだ。

分かっているさ。

十分。

自分が馬鹿なことをしようとしていることくらい。

それでも……命を落としてしまったとしても、譲れないものくら
い僕にだってある。

「良いね。そんな目をした奴を俺は何人が殺してきたぜ」

「脅しは効かない」

「脅し、じゃねえんだけどな」

そう言いながらも、アーロンは地面を蹴る。

それに合わせて僕も走る。

アーロンが持っているのは両手剣。

正直に言ってナイフでは、あれは受け切れない。

影の魔法はきつと切り札になる。

まだ見せない。

切り札を出す時は、勝負を終わらせる時だ。

まずは、一発、殴ってやる。

スムーズな動作でアーロンは剣を振り上げる。

アニーさんに近づいた時程ではないけれど、少し、周りがスローモーションに見える。

どういう時にこの状態になれるか分からないけれど、これは好奇だ。

「おらよっ！」

もし、普段の僕なら間違いなく斬られていた　　だけど、今は、何とか紙一重で避けた。

僕はナイフを持っていない左手でアーロンの顔を殴りにかかった。

当たる

そう思ったけれど、アーロンもギリギリのところで僕の拳を避ける。

「ほう、良い動きするじゃねえか。危ねえんだよ」

両手剣から片腕話して僕の顔面に一発、叩き込まれた。

「きゃあああ!？」

アニーさんの悲鳴が聞こえて来た。

痛い。

涙が出そうな程、痛い。

殴られた事なんて、小学生以来だから余計にかもしれない。
今すぐ、やめたい。

だけどっ！

「わあああああ！」

今度はナイフでアーロンの右手を斬ろうとする。

だけれど、アーロンは上手いこと、片手で両手剣を操って僕のナイフを弾く。

そして、僕を両手剣で斬り殺そうとしてくる。

その太刀筋に迷いはない。

まだ、だ。

まだ、いけるはずだ……

僕は思い切って両手剣の刃に向かって踏み込む。

そんな僕の行動はアーロンも予想外だったのか、一瞬、剣先がぶれた。

その一瞬の遅れ、その間に僕はアーロンの懷に抱きつくようにして入る。

これなら……

僕の拳は格好の良い拳じゃない。

ほとんど、どうやって握っているかも分からないような適当な握り。

それでも 思いだけはのせて。

「自分勝手なことばかり言ってんじえねえよ！」

思いつきり、奴の頬に叩き込む。

「はあ、はあ、はあ」

僕の拳を受けてアーロンは吹き飛ばす。 まではいかなくとも、転んだように仰向けに倒れ込む。

口から血が出て来ている。

きちんと、拳が当たった証拠。

やった。

そう思った瞬間に、僕の腹部に痛みが走る。

「ぐっ」

おそらく僕は2・3メートルくらい吹き飛ばす。

痛い痛い……

「やってくれるじゃねえか」

蹴られた……それは分かる……だけど、倒れこむ瞬間に蹴る何て……

見下すような視線を向けながら立ち上がるアーロン。
効いていなかったのか？

「おまえのヘナチヨコパンチなんて効くかよ」

ペツと血を口から吐いてから、ゆっくりと僕に近づいてくるアーロン。

もう、いいか。

そう思ってしまう。

勝つだけなら合気道でも魔法でも使えば良かった。
だけど、僕はアーロンを一発、殴りたかったんだ。
それができたんだ。

次は約束を果たそう。

ボロボロにはなっているけれど、勝てば、いいんだよね、アストリア。

ゆっくりと、こちらに歩いてくるアーロン。

アストリアの放つ矢は来ない。

僕を信頼してくれているのかな？

それなら……嬉しいな。

「はっ、簡単には殺してやらないぜ。死んだ方が楽だと思えるくらい酷い目に合わせてやるぜ」

後、二歩。

「何を笑ってやがるんだ？ 気でも触れたか？」

後、一步。

「まあ、おまえの女は俺がもらってやるから、まあ、安心しな」

ここだ。

「シャドー・ランス
影の槍」

僕の影から一本の槍が飛び出す。

それは一直線にアーロンの鳩尾に突き刺さる。

完全な不意打ち。

こいつには罪を償ってもらいたいから、殺さない。だから、槍の先は尖っていない。

もしかしたら、それは槍とは言わないのかもしれないけれど、この際、関係ない。

アーロンが白目をむいて、倒れ込むのがスローモーションで見える。

もっと、前に戦闘中にスローモーションで見えるようになれよ。今更、文句を言っても仕方ないけれど。

「アストリア、卑怯な勝ち方になっちゃったけど、勝ちだよな？」

「ええ、勝ちですね。ご主人様のカケル」

耳元の近くでそう聞こえたような気がした。

そして、僕の視界は真っ暗になっていくのだった。

エピソード

あの後、ゴブリン達は無事、討伐されたらしい。

アストリアが数を減らした事で、だいぶ討伐作戦は楽になったらしい。

そのことに対しての報奨金がアストリアの主である僕のところには驚いた。

何でも、奴隷の財産、名誉などは全て主人である僕の物になるそう。

僕だって仮にも男なんだ、女の子が討伐したモンスターの報奨金を我がもの顔で受け取るなんてプライドが……まあ……女の子に守ってもらおう　と考えていたから、あまり強くは言えないんだけれど……

そう思ってアストリアに渡すようにギルドの役員の人に伝えたら、何でも誰かが所有している奴隷に主人以外の人間が物を与えたら罪になるそう。

変な理屈としか思えないけれど、そう言われてしまったら、もはや、反論できない。

だから僕に突きつけられた選択肢は初めから『受け取る』か『受け取らない』かの二択だったらしい。

仕方がないので間接的にアストリアにこの報奨金をあげることにした。

そのまま、あげる　と言ったら、「いいませんわ」と拒否されたので、「このお金でお肉を買いに行こうか」と言ったら、アストリアは飛び跳ねて喜んでいて。

もちろん、アストリアは冷静に対処していた、と自分では思っていたみたいけど……

普通にもらったお金でお肉を買ったら良いと思うのだけど彼女に

は彼女に言い分があるようなので、そこは追求しない。

そして現在、僕がどうしているかと言うと、アニーさんの両親が営む宿のベッドの上で休んでいる。

馬から落ちた　もとい、降りた時にした怪我のところには痛々しく包帯が巻かれている。そんなにたいしたことはないのに……。

結局、僕、アストリア、アニーさん、アニーさんのお父さんの中で、怪我をしたのは僕だけだった。

その怪我也、お腹の打撲と擦り傷だけだったので、動いても問題ないはずなのに、アニーさんが「ダメです。寝ていてください！」と言ってきたので、仕方がなく寝ている。

そもそも、打撲に関しては僕の完全な我がままでした決闘でついたものだからアニーさんに気をつかってもらう必要はないんだけれど……。それどころか、かすり傷も僕の不注意だから、こんなに包帯まで巻かれると逆に自分のふがいなさを晒されているようで、恥ずかしい。

そうそう、あの決闘から、既に一日経って、ジョゼフさんとの約束の日になっている。

ので、本当ならジョゼフさんのところに行かないといけないのだが、ジョゼフさんが昨日、お見舞いに来てくれた時「明日ではなく、怪我が治りしだいで構いませんよ」と言ってくれたので、お言葉に甘えることにする。今回のことはジョゼフさんが所属するランド商会も少なからず関与しているから、そのことも考慮しての処置だろう。ちなみに、ジョゼフさんに聞いた話なのだけれどアーロンにはおそらく重い刑がかけられるらしい。

今回の件で発覚したアドルフさんの殺害容疑も罪に問われる訳だから。

黙秘するかと思いきや、案外、簡単に口を割ったらしい。状況証拠ばかりだったので、黙秘するかとも思ったんだけど。

そして、今、僕のベッドの横には、なぜか、仲良くアストリアと

アニーさんが座っている。

「アニーの剥いてくれたアップルはおいしいですわね」

「もう、アストリアさん、カケルさんのために剥いたんですから、全部、食べないでくださいよ」

なぜ、二人が普通に会話しているかは僕には分からない。

僕がアーロンとの決闘の後、気絶している間に何かがあったのは間違いないけれど、残念ながら、それを僕に知る術はない。

唯一の方法だった　どうして仲良くなっているの？　と聞くという行動は一度、起こしたがすぐに「内緒」と二人声をそろえて言われた。

命令すればアストリアから話しは聞けるけれど、それをする勇氣は僕にはなかった。

「それにしても、だらしないですわね。わたしの主なら、それくらいの怪我は一日で治して欲しいものですわ」

アニーさんが剥いているアップルの四分の一をかぶりながら、そう言うアストリア。

決闘の直後に僕のことを名前で呼んでくれたような気がしたけれど、生憎、僕の勘違いだったようだ。

僕の事をアストリアが名前で呼んでくれることはない。

話しかけてくれるようになったのは嬉しいけれど。

後、アップルはやっぱ林檎のことだったみたいだ。

「早く傷を治して、フランカを買いに行きますわよ。きっと、わたしのことを心配しているに違いありません」

「もう、まだ、カケルさんは動けませんってば」

「ですが……」

「もう少しの辛抱ですから、アストリアさん」

「分かりましたわ」

「あ、あの――僕はたぶん大丈夫だと思うんですけど……」

「病人は寝ていてください！」

「……はい」

アニーさんに怒られた。

元の世界に戻りたい　それは変わらないけれど、二人と一緒に
過ごす時間が楽しくなってきたことに気づく僕だった。

エピローグ（後書き）

あとがき

第一章《宿娘と奴隷姫》はこれにて完結です。

ここまで読んでくださった皆様、本当にありがとうございました。今後の参考にしたい　と思っておりますので、できれば感想の方がありましたら、お願いします。

誹謗中傷をされたら泣きますけれど（笑）

（感想の方は時間ができ次第、返信させていただきます）

さて、このトラスト・オブ・トゥルース、正直なところVRMMOでスタートさせた意味は、殆ど皆無です（汗）

そもそも、VRMMOで開始する利点と言えば、主人公がその世界での魔法などを使い馴れているような設定にするために、使われるんですけど、本作ではぶっちゃけ、あんまり重要ではありません。

普通のMMOでも良かったんですが

流行りに乗ってみました。

すいません。嘘です。

本当の理由はゲームから離れていた主人公がゲームの世界に戻るためのきっかけのために、興味をひかせるための小道具としてVRMMOにしてみました。

それでも、もっと他の理由を考えろよ！　と言われたら、正直、その通りなので困りますが。

本編についてなのですが起承転結が難しいこと難しいこと頭の中ではきちんと起承転結にしているつもりでも読んでいただいた皆様なら分かると思います。転が圧倒的に、弱い。

もっと、ダイナミックな転になるはずだったんです……三流推理小説みたいなの（笑）

ついでに言うところのつもりのエピソードも短い（笑）
そんな弱点だらけの小説です。

プロのライトノベル作家さんがいかに凄いかを思い知らされる結果になりました。

ついでに告白すると

実はこれ、MF文庫の新人賞に出すつもりで書いた作品の一つだったんです。

と、言ってしまったのは誤解が生じるのですが、正確には本命で書いていた三作品を書く途中、一作の過分すぎる設定を削った際に生まれたのが本作です。

そもそも、新人賞に出そうと思っている作品は一人称ではなく三人称ですので（汗）

三人称を書くのは意外と得意？ なのですが一人称を書くのは苦手気味でしたので二自作と同じで練習のつもりで書いてみました。（描写をできる限り減らしポンポンと字の文も会話文のように読めることを目標にしてみましたので描写不足が指摘されております）

実際問題、完成度としては新人賞に出そうと思っている作品の方が、比較できない（笑）くらい上なそうなので（友人に読んでもらった感想）本来なら、そのまま、削除してしまうつもりだったのでさすがの悪い子程、可愛いといえますか……何となく削除のボタンを押せず、どうせだったら掲載しよう、と思い小分けして掲載しました。

ですから、実は欠点だらけなのは百も承知で掲載しております（汗）

そんな本作ですが、皆様に感想、評価、お気にいり登録をいただいて、作者としてはたいへん驚くと共に感謝の気持ちで胸の中が一杯です。

本当にありがとうございます。

さて、本題？ なのですが、現在作者はにじファンの方で書かせていただいております、ゼロ魔の二自作の方を本年度中に完結させる と明言しておりますので、こちらは少しお休みです。

第二章《奴隸騎士と旅の始まり》の更新は早ければ10月、遅ければ来年の2月くらいになる予定です。

そろそろ、本命の方の本格的な誤字チェックなどもしなければいけませんので。

ついでに言う受験生で勉強をしないといけないため、一日の間にとれる執筆時間が極限まで限られていることも理由の一つです。PCの前に向かえる時間が一日、一時間くらいが限界です（汗

それと、完結扱いにしました理由は第一章完結の意味と、三カ月更新されませんでした と、題名の上に出るとプレッシャーになりますので……

時間は空いてしまいましたが、きちんと続編書きますよ（汗
現在、時間の都合などで更新できていない二次作も含めて。

では、長く書いてしまいましたが、ここで失礼させていただきます。

天童翼

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5142u/>

トラスト・オブ・テュルース

2011年8月14日18時18分発行